四万遺跡

単独7軸道路整備推進事業（国）353号駒岩拡幅事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

二〇一四

群馬県中之条土木事務所　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第589集

四 万 遺 跡

単独７軸道路整備推進事業（国）353号駒岩拡幅事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

群馬県中之条土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

四 万 遺 跡

単独７軸道路整備推進事業（国）353号駒岩拡幅事業
に 伴 う 埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2014

群 馬 県 中 之 条 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

四万遺跡は、吾妻郡中之条町中心部から、江戸時代より湯治場として栄えた四万温泉に向かう街道途中に位置しています。この街道は現在、国道353号線となり、人々の往来を支えています。今回この国道353号線の拡幅工事に伴い、群馬県中之条土木事務所の委託を受けて、平成25年度に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が遺跡の発掘調査を実施いたしました。

四万遺跡がある吾妻地域では、近年八ツ場ダム建設に伴う発掘調査などにより、多くの縄文時代の遺跡があることが知られています。遺跡周辺の久森遺跡では、縄文時代中期後半の環状列石と敷石住居があったことがわかっています。

今回の調査でも、縄文時代中期後半の柄鏡形敷石住居が確認されました。他遺跡の調査成果と共に、縄文時代中期後半の中之条地域における縄文人の動向を解明する一助になる資料を提供できたものと考えております。

最後に、発掘調査から報告書作成に至るまで、群馬県中之条土木事務所をはじめ、群馬県教育委員会、中之条町教育委員会、並びに地元関係者の皆様からは種々のご指導、ご協力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、これらの関係者の皆様に心から感謝を申し上げて序といたします。

平成26年８月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　吉野　　勉

例　言

1．本書は、平成25年度社会資本総合整備(防災・安全)国道353号(駒岩拡幅)事業に伴い発掘された四万遺跡の調査成果を、平成26年度単独７軸道路整備推進事業(国)353号駒岩拡幅事業に伴う四万遺跡の発掘調査報告書として刊行したものである。

2．四万遺跡は群馬県吾妻郡中之条町大字四万3458－１、3463－１に所在する。

3．事業主体：群馬県中之条土木事務所

4．調査主体：公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．整理主体：公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

6．発掘調査の体制と期間は次のとおりである。

調査担当：小林正(専門員(主任))

遺跡掘削請負工事：吉澤建設株式会社

地上測量及び空中写真撮影：株式会社測研

履行期間：平成25年６月１日～平成25年９月30日

調査期間：平成25年７月１日～平成25年７月31日

調査面積：474.55㎡

7．整理事業の体制と期間は次のとおりである。

整理担当：長谷川博幸(主任調査研究員)

履行期間：平成26年４月１日～平成26年８月31日

整理期間：平成26年４月１日～平成26年６月30日

8．本書作成関係者

編集・本文執筆：長谷川博幸

デジタル編集：齊田智彦(主任調査研究員)

遺構写真：発掘調査担当者

遺物写真：石坂茂(専門調査役)、石田典子(主任調査研究員)

遺物観察・観察表執筆

縄文土器：石坂茂

石器・石製品：石田典子

保存処理：関邦一(補佐(総括))

9．出土炭化材の鑑定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社にお願いした。

10. 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、中之条町教育委員会生涯学習課(歴史と民族の博物館ミュゼ)、有限会社田村旅館にご協力、ご指導いただきました。記して感謝いたします。

11. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡　例

1．本文中に使用した方位は、総て世界測地系(日本測地系2000平面直角座標Ⅸ系)の北を用いた。調査区はＸ＝73779～73865、Ｙ＝-92619～-92665の範囲に収まる。

2．遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。

3．遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。遺物写真の縮率は原則１／３とし、それ以外のものは明記した。

4．遺物番号は出土遺構ごとの通し番号とし、器種・分類順に記載した。番号は遺構図、遺物実測図、遺物観察表、遺物写真図版とも一致している。

5．本書の図版に使用したスクリーントーン及びマークは、次のことを示す。

土器出土地点　石器出土地点

遺構平面図・断面図　焼土(平面図)　撹乱(断面図)

遺物図　石器　摩耗痕の範囲　摩耗痕の範囲(断面図)

6．遺構の主軸方位・走向は、長軸方向で北から東西90°以内を主軸方位とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合Ｎ-○°-Ｅとした。遺構の面積は、下端を計測した。計測はプラニメーターで３回行いその平均値を採用した。遺構・遺物の計測値で、全体を計測できないものについては、現存の値を記載し(　)で表した。

7．土層断面の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に基づいている。

8．遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。

・計測値の(　)は推定値を示す。

・土器計測値は、口：口径、底：底径、高：器高と略記した。

・土器の胎土については、下記の通り略記した。

Ａ：石英、長石、黒・白色粗・細砂を中量含む比較的緻密な胎土。

Ｂ：石英・長石の礫・粗砂と雲母の粗・細砂を多量含む比較的緻密な胎土。

Ｃ：雲母・石英・長石の粗・細砂を中量含む緻密な胎土。

Ｄ：中量の石英、長石、黒・白色粗・細砂と繊維を含む比較的緻密な胎土。

Ｅ：中量の長石、黒・白色細砂と微量の石英礫を含む緻密な胎土。

9．本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院　地勢図１:200,000「長野」(平成18年11月1日発行)

「高田」(平成18年10月1日発行)

国土地理院　地形図１:50,000　「中之条」(平成10年８月１日発行)

「四万」(平成５年12月１日発行)

群馬県　地形分類図１:50,000　「中之条」(平成15年)

「四万・岩菅山」(平成16年)

中之条町　１:10,000地形図(昭和63年)

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
本文写真目次
写真図版目次

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 2
　　１．調査区の設定 …… 2
　　２．調査経過 …… 2
　　３．整理作業の経過 …… 2

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3
　第１節　遺跡の立地 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
　第３節　基本土層 …… 16

第３章　検出された遺構と遺物 …… 18
　　１．調査の概要 …… 18
　　２．敷石住居 …… 18
　　３．土坑 …… 25
　　４．遺物集中地点・遺構外出土遺物 …… 30

第４章　自然科学分析 …… 33
　第１節　分析の目的 …… 33
　第２節　出土炭化材樹種同定 …… 33
　　１．試料 …… 33
　　２．分析方法 …… 33
　　３．結果 …… 33
　　４．考察 …… 33

第５章　調査成果のまとめ …… 36
　第１章　柄鏡形敷石住居について …… 36
　　１．柄鏡形敷石住居について …… 36
　　２．周礫について …… 36
　　３．方形石囲い施設について …… 37
　　４．小結 …… 38
遺物観察表 …… 41
報告書抄録
写真図版

挿図目次

第１図　遺跡位置図(国土地理院地勢図１:200,000「長野」
平成18年11月１日「高田」平成18年10月１日発行を使用)・・・・ 1
第２図　遺跡位置及び周辺図(この地図は、中之条町町長の
承認を得て、同市発行の10,000分の１地形図を使用
・複製したものである。)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第３図　遺跡周辺地形分類図(群馬県『土地分類基本調査』
(中之条2003)・(四万・岩菅山)による・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第４図　周辺遺跡位置図(国土地理院発行地形図１:50,000「中之条」・
「四万」使用)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第５図　昭和47年調査全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第６図　昭和47年調査N-11グリッド、L-９～M-11グリッド・・・・ 11
第７図　昭和47年調査G-９～H-10グリッド・・・・・・・・・・・・・ 12
第８図　昭和47年調査出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第９図　昭和47年調査出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
第10図　昭和47年調査出土遺物(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第11図　柱状基本土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第12図　四万遺跡全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第13図　１号住居(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第14図　１号住居(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第15図　１号住居(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第16図　１号住居(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第17図　１号住居出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第18図　２号・３号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第19図　２号住居出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第20図　１号～６号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第21図　７号～10号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第22図　土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第23図　遺物集中地点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第24図　遺物集中地点出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第25図　遺物集中地点出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第26図　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第27図　周礫を伴う柄鏡形敷石住居(１)(荒砥二之堰遺跡)・・・・・ 39
第28図　周礫を伴う柄鏡形敷石住居(２)・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第29図　石囲い施設を伴う柄鏡形敷石住居・・・・・・・・・・・・・・ 40

表目次

第１表　主な周辺遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第２表　１号住居ピット計測値一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第３表　樹種同定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

本文写真目次

写真１　炭化材断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

写真図版目次

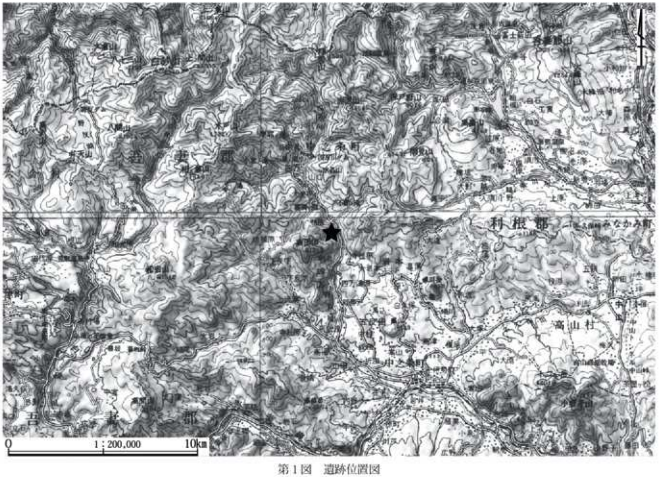
PL.１　１　調査区全景(北西から)
２　調査区全景(南から)
PL.２　１　１号住居全景(南から)
２　１号住居柱穴検出状況(南から)
PL.３　１　１号住居石囲い炉と石囲い施設全景(南から)
２　１号住居石囲い炉土層断面(南東から)
３　１号住居石囲い施設土層断面(東から)
４　１号住居石囲い炉炉石除去後状況(北から)
５　１号住居石囲い施設礫除去後状況(南から)
６　１号住居遺物出土状況(南東から)
７　１号住居磨製石斧出土状況(南東から)
PL.４　１　２号住居全景(南西から)
２　３号住居全景(南西から)
PL.５　１　１号土坑遺物出土状況(南西から)
２　１号土坑出土遺物(南西から)
３　１号土坑全景(北西から)
４　２号土坑全景(北西から)
５　２号土坑遺物出土状況(北西から)
６　２号土坑出土遺物(北西から)
７　３号土坑全景(西から)
８　４号土坑全景(西から)
PL.６　１　５号土坑全景(西から)
２　６号土坑全景(南西から)
３　７号土坑全景(北西から)
４　５・６・７号土坑(西から)
５　８号土坑遺物出土状況(北から)
６　８号土坑全景(西から)
７　９号土坑全景(南西から)
８　10号土坑全景(南西から)
PL.７　１　１号遺物集中地点全景(北から)
２　１号遺物集中地点全景(南から)
３　基本土層(西から)
４　調査風景(北東から)
５　１号住居調査風景(西から)
６　四万遺跡近況(北から　平成26年５月23日撮影)
PL.８　１号住居出土遺物
２号住居出土遺物
１号土坑出土遺物
２号土坑出土遺物
PL.９　７号土坑出土遺物
８号土坑出土遺物
遺物集中地点出土遺物(１)
PL.10　遺物集中地点出土遺物(２)
遺構外出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

国道353号線は、群馬県桐生市広沢町を起点とし、新潟県柏崎市柳橋町に至る道路である。群馬県内は、桐生市・みどり市・前橋市と赤城南麓を沿うように通り、利根川を渡り、吾妻川左岸沿いに中之条町に至る。中之条町からは北上し、温泉で有名な四万まで続く。中之条町四万から新潟県魚沼郡湯沢町までは車両不通区間となっている。中之条町中心部から四万温泉までの区間は、四万街道と通称され、江戸時代から温泉利用者などが通行する街道として使用されていた。しかし、渓谷沿いの道路であり、幅員が狭いうえ、屈折箇所が多々ある道路でもあった。そのため、道路幅を拡張し、屈折を緩やかにし、交通安全を確保するための道路整備が計画された。事業範囲において、周知の埋蔵文化財包括地を通過することがわかり、埋蔵文化財の取り扱いに関わる行政的措置が必要となった。中之条土木事務所から照会を受けた群馬県教育委員会は、平成24年10月に試掘調査を行った。

試掘調査は事業地内に、幅１ｍ～1.5ｍ・長さ４ｍ～22ｍの試掘坑を４本設定し、遺構検出面の確定及び遺構有無の確認、遺物出土の確認を行った。その結果、縄文時代住居跡及び土坑が認められ、縄文土器が出土した。このことから、群馬県教育委員会は、中之条土木事務所に事業地の発掘調査が必要であることを回答した。この結果を受けた中之条土木事務所は、群馬県教育委員会と当該事業地の発掘調査実施に向けての調整を図った。そして、中之条土木事務所と当団の間で発掘調査委託契約が締結され、平成25年７月１日調査開始にむけた準備が整うこととなった。



第１図　遺跡位置図

（国土地理院地勢図1:200,000「長野」平成18年11月1日「高田」平成18年10月1日発行を使用）

第２節　調査の方法と経過

１．調査区の設定

四万遺跡は、調査範囲が狭小であったため、調査区割をせずに調査を行った。調査区の座標値は、国家座標第Ⅸ系（世界測地系）を用いた。

２．調査経過

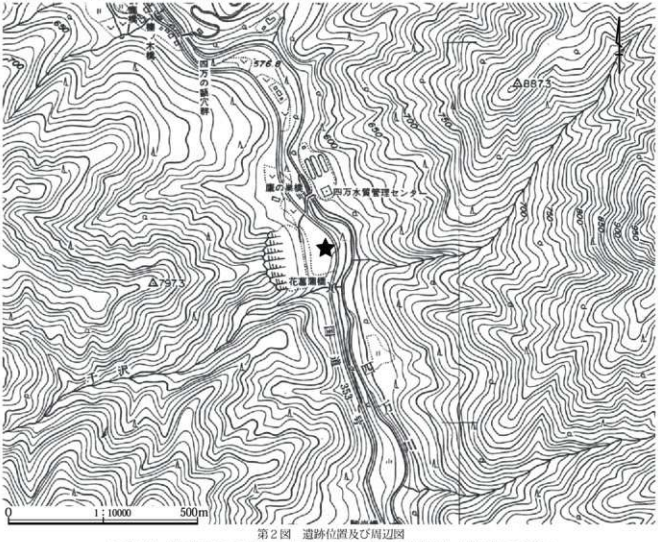
調査は平成25年７月１日より着手した。同日より表土掘削を開始した。表土掘削は翌２日に終了した。調査区南端部は狭小のため、重機による表土掘削ができなかったが、７月５日、作業員により表土掘削を行った。７月３日より遺構確認作業を行い、順次遺構調査を実施した。７月23日には調査区全景撮影を行い、翌24日には旧石器遺構確認調査を行った。すべての調査が終了し、７月25日から埋戻しを実施した。７月26日には調査区すべての埋戻しが終了し、同日調査機材等を撤去し、調査を終了した。

３．整理作業の経過

四万遺跡の整理作業及び報告書編集作業は平成26年４月１日から平成26年６月30日まで実施した。収納されている出土遺物や記録類の確認作業から開始した。次に、デジタル遺構写真のリネーム作業、遺構図の修正作業、土器・石製品の分類・復元作業及び写真撮影などを行った。

その後、報告書に掲載する遺構写真の選び出し作業、遺構図のデジタルトレース作業を行い、原稿を執筆し、報告書作成のための組版作業をデジタルで行った。

整理作業の最後には、遺物管理台帳及び写真管理台帳を作成し、今後の活用に備え遺物やその他資料の収納作業を行った。



第２図　遺跡位置及び周辺図

（この地図は、中之条町町長の承認を得て、同市発行の10,000分の１地形図を使用・複製したものである。）

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　遺跡の立地

四万遺跡は群馬県中之条町大字四万に所在する。中之条町は群馬県の北西部に位置し、町域の大半は山岳地帯である。新潟県との県境を接しているが、平成22年に六合村を合併し、長野県とも接している。中心市街地は、東西に長く、ほぼ長方形をした中之条盆地に立地している。中之条盆地は、榛名山北麓と三国山脈の山塊に囲まれている。盆地内では、段丘礫層の下位に縞状粘土層が堆積している。この粘土層には、淡水性の珪藻類や、植物の葉片化石などが含まれている。これらは内陸湖の堆積物であり、湖が形成されていたことがわかっている。この湖は、古中之条湖と呼ばれており、榛名山と小野上山の火山活動により、吾妻川が堰き止められ形成された火山堰止湖であると考えられている。盆地北部の山塊を縫うように名久田川・四万川・山田川が流下、中之条盆地に流れ込み、吾妻川に合流する。各河川流域には河岸段丘が発達している。

遺跡の立地する四万は、中之条町の北部に位置し、新潟県と県境を接する山間部にある。遺跡は高田山(標高1212m)の北東麓に位置するが、四万を含む中之条町を取り囲む山は、他にも赤沢山(標高1454m)・稲包山(標高1597m)・木戸山(標高1732m)・相ノ倉山(標高1732m)などがある。赤沢山・稲包山は、今からおよそ250万年以上前の第三紀鮮新世の火山活動により形成された山々であり、三国山脈に連なっている。木戸山・相ノ倉山は、今からおよそ60万年～ 100万年前の第四紀更新世の火山活動により元の地形が形成され、吾妻郡の中央部の山々に連なっている。これら山々では地すべりが所々で見られる。第３図中央部の寺社平地区や大岩本地区のように、山間部では地すべりにより窪地状になった地形を利用し、集落が形成されている。

遺跡の東を流れる四万川は、稲包山を源に発し、沢渡川と合流し、吾妻川に流下する全長約20㎞の河川である。上流は、急峻な山間部を流下しており、浸食を重ね、峡谷・V字谷・滝などの地形を形成している。上流の日向見、新湯、山口には渓谷に沿い温泉が噴出し、四万温泉郷を形成している。四万温泉郷は昭和29年(1954年)に、国民保養温泉地第１号に指定されるなど、湯治客や観光客でにぎわっている。中流域の四万秋鹿地内には約130mの間に甌穴がある。甌穴はポットホールとも呼ばれ、流下する礫の渦流作用により、川底がえぐられて形成された円筒状の穴である。これら甌穴は、四万甌穴群として県指定天然記念物となっている。中流域から下流域にかけては、浸食作用により河岸段丘を形成している。本遺跡もまた河岸段丘上に立地している。

四万川の下流域では中之条盆地に河岸段丘が発達している。中之条盆地付近での段丘は、『土地分類基本調査・中之条』(群馬県、2003)によると、ローム層の被覆関係により「上位段丘」・「中位段丘」・「下位段丘」・「最下位段丘」に分けられている。

本遺跡は、前述したように河岸段丘上に立地する。山間部に入った人々が少しでも生活しやすい場所を求め、山あいの平坦地に辿り着いたものと考えられる。なお、本遺跡付近の地表標高は、563m～ 561mを測る。

第２節　歴史的環境

四万遺跡の周辺地域を含む中之条町には、縄文時代以降、各時代の遺跡が存在している。以下、時代ごとに概観する。

縄文時代早期

中之条町町域では、いまだ旧石器時代の遺跡は未確認であり、人類の生活痕跡が、当該地域で確認されるのは縄文時代以降のことである。縄文時代早期の遺構を伴う遺跡は、確認されていない。名久田川流域にある下平遺跡からは押型文土器が出土しており、細尾岩陰遺跡では、尖底土器が出土している。今後、住居等の遺構の検出が期待される。

縄文時代前期

伊賀野遺跡(第４図・第１表５、以下カッコ内番号は、第４図・第１表に記す番号と一致する)では、住居２軒

第３図　遺跡周辺地形分類図（群馬県『土地分類基本調査』（中之条2003）・（四万・岩菅山）による）

が確認されている。この２軒の住居は、小型住居であり、大型土器の破片等は確認されず、小型土器片や石鏃とその破片類が出土していた。早期の土器が出土した下平遺跡においても竪穴住居が確認されている。住居は、諸磯ｂ式期の住居で、規模が約10ｍと大型である。

縄文時代中期

本遺跡隣接地は、ボウリング場建設に伴い、昭和47年に調査されている（１）。調査区域は今回調査地西隣接地であるが、詳細は不明である。地元の古老などの話から、今回調査の隣接地であることは間違いないが、調査より40年以上を経てしまい、地形等も改変したことが考えられ、特定することはできなかった。第５図の道路位置から本遺跡の推定範囲を示したが、道路の改築等も考えられる。

昭和47年調査では、敷石住居３軒及び遺構外遺物が確認され、土器・石器が出土している。土器は、加曽利Ｅ３式が主体であるが、少量ながらも堀之内１式土器が出土している。今回調査で判明した遺構とは、同一遺跡内ではあるが、土器様相は若干異なっている。参考資料として、中之条町教育委員会が破棄する、この時の調査成果の一部を第５図～第10図に掲載した。

中之条町の縄文時代中期遺跡として、他に久森遺跡（４）がある。久森遺跡は、上沢渡川の中流域に位置する。竪穴住居５軒・柄鏡形敷石住居３軒・二重の様相を呈する環状列石遺構が確認されている。柄鏡形敷石住居は、いずれも加曽Ｅ４式期のものである。環状列石は、約40ｍの外縁環状列石と約30ｍの内縁環状列石が同心円状に並んでいる。外縁環状列石は、12の配石群から形成されており、内縁環状列石は、７の配石群から形成されている。なお、竪穴住居５軒は、柄鏡形敷石住居に先行する加曽Ｅ３式期のものである。環状列石下からは、加曽Ｅ３式土器や加曽Ｅ４式土器が出土している。環状列石は竪穴住居構築時から柄鏡形敷石住居構築時まで継続していたと考えられる。

縄文時代後期・晩期

この時期として確認される遺跡は少ない。その中でも、清水敷石住居跡（清水遺跡（10））は後期から晩期にかけての遺構・遺物が確認された遺跡である。後期の遺構としては、堀之内式土器が出土した敷石住居（１号住居）がある。晩期では、当該期の特徴的な土器である浮線文系土器が出土している。浮線文系土器は体部の条痕や口縁部上端の並行沈線文などから、長野県を中心に出土する氷Ｉ式土器の影響を受けているとみられる。現在の県境を越えた交流が想定される。また土偶や耳飾り、柄杓型土器なども出土している。

弥生時代中期

縄文時代に引き続き、弥生時代も人々が住んでいたことがわかっているが、発掘調査により明らかになっているのは中期以降のことである。中期で著名なのは、東吾妻町にある岩櫃山鷹の巣遺跡である。この遺跡は、岩櫃山（標高802ｍ）山頂付近の岩陰を利用した再葬墓であり、1939年に杉原荃介らにより発掘調査が行われた。出土した土器は「岩櫃山式土器」として、中期前半を示す標式とされている。

中之条町内でも岩陰を利用した遺跡が確認されている。上沢渡にある有笠山遺跡は、有笠山（標高884ｍ）の中腹南面岩壁の岩陰を利用していた。1953年に行われた調査では、中期後半栗林式期の炉を伴った住居状遺構が発見されている。1990年に行われた調査では、中期前半の土器と共に、大量の焼人骨・穿孔されたヒトの指骨が４点出土している。棺とみられる土器は出土しなかったが、再葬墓と位置付けられよう。中期前半には墓域として、中期後半にはキャンプサイトとして利用されていたようである。

中期の再葬墓としては、他に名久田川沿いに宿割遺跡があり、住居址としては成田遺跡（14）がある。成田遺跡では、地床炉と、それに伴うピットが４基検出されている。遺跡地周辺からも土器が出土しており、周辺一帯に集落が広がると考えられる。出土した土器の様相から、中期でも前半に位置づけられる。

弥生時代後期

後期に入ると、中之条市街の段丘面に集落が広がっていくようである。天神遺跡（23）・川端遺跡（24）・長岡遺跡（25）・中学校裏遺跡（32）などが知られている。特に隣接しあう川端遺跡・天神遺跡では、200軒以上の住居が調査された。いずれも樽式土器が出土している住居であった。鉄剣・鉄斧・鋤鍬などの金属器や人物形土器などが出土している。規模の大きさ及び出土遺物など、遺跡の内容等から地域の拠点的な集落と考えられる。

古墳時代

中之条町市街地の段丘面では、天神遺跡・川端遺跡・長岡遺跡などで集落が調査されている。天神遺跡・川端遺跡では６世紀初頭に榛名山より降下した榛名二ツ岳伊香保テフラ(以下Hr-FAと記す)下の水田も発見されている。古墳時代中期に行われていたとみられる祭祀跡が、川端遺跡にて確認されている。祭祀跡はHr-FAの火山灰に埋もれた状態で検出された。５m四方の範囲から土師器杯・高杯・壺などが重なり合うように出土した。併せて臼玉をはじめとする石製模造品も出土している。このようなHr-FA下の祭祀跡は、榛名山麓の高崎市下芝天神遺跡・渋川市金井東裏遺跡や赤城山麓の渋川市宮田諏訪原遺跡など、県内でも確認されている。また、川端遺跡では５世紀後半に属する住居から赤玉が２点出土している。

昭和10年に県下一斉に古墳調査が行われ、その集成である『上毛古墳綜覧』によると、吾妻郡では274基の古墳が確認されている。現在の中之条町町域ではそのうちの二割強にあたる65基が確認された。内訳は、旧中之条町40基、名久田村18基、沢田村７基、伊参村０基、六合村０基である。石ノ塔古墳(28)は、現在中之条町で知られている古墳の中で築造が最も古い古墳である。主体部は、竪穴式石槨であり、直刀・刀子・鉄鏃・鉄斧などが副葬されていた。５世紀代に築造されたとみられる。また、四万川下流域の小川では後期の群集墳が形成され、円墳４基が現存している(29)。

奈良・平安時代

律令期に入ると、ほぼ現在の群馬県域にあった上野国は、12の郡に分かれて行政が行われていた。そのうち中之条町域は吾妻郡に含まれている。平安時代に成立した『和名類聚抄』によると、吾妻郡は「長田郷」・「伊参郷」・「大田郷」の３郷からなっていた。いずれの郷も、確実に比定されていない。この時期の注目すべき遺跡として、天神遺跡と金井廃寺(35)が挙げられる。天神遺跡は、奈良時代から平安時代にかけての12棟の掘立柱建物跡が調査されている。同遺跡内の竪穴住居からは、奈良三彩や銅印など特殊な遺物が出土している。遺跡の内容から、豪族の居宅か官衙の可能性が考えられる。

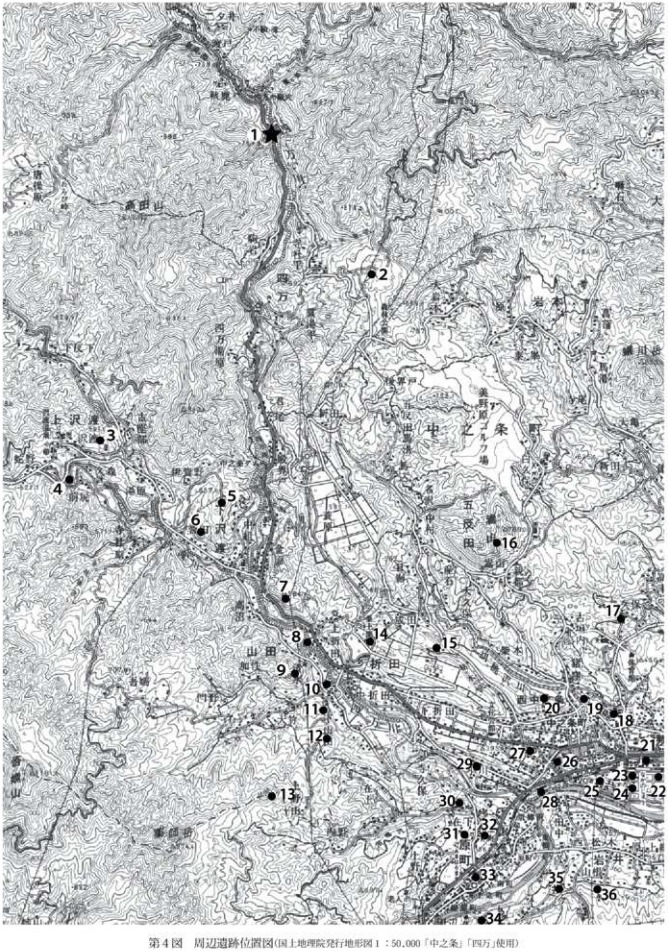
吾妻川右岸に位置する金井廃寺は、遺跡地内から直径39cmから50cmある円形の礎石が22個以上確認され、瓦が多数出土している。瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦が知られている。軒丸瓦の古いものは、断面形状が片切山形をなす三重圏文を配した単弁八葉文で、７世紀後半の意匠を持つ。寺院はそのころ創建されたと言える。金井廃寺は、「初期寺院」として位置付けられている。この時期に山間部で有力寺院が建てられた理由について、様々な議論があり、定まっていない。しかし、それだけの大きな力となるような社会が形成されていたことは確かである。

中世以降

中世城館跡が多く存在する。吾妻郡は、信濃と上野さらには越後を結ぶ地域であり、交通の要所であった。新潟と群馬を結ぶのは、現在、三国峠を通る国道17号が主なルートであるが、当時は越後側の浅貝から稲包山を抜け四万から中之条に至るルート(奥州故道)も使われていた。そのため、城館跡が多い。第４図に示した範囲でも、入道城(３)・天狗山城(６)・内山城址(７)・折田屋敷(８)・桑田城址(９)・吉城(11)・山田古城(12)・高野平城(13)・千貫屋敷(15)・嵩山城(16)・城峰城(20)・中条城(吾妻城)(26)・稲荷城(30)・原町陣屋(33)などがある。

吾妻郡を含む西上州は、室町時代、関東管領であり、上野国守護であった上杉氏が支配していた。上杉氏は西上州の国人層を被官化することにより、自らの所領と彼らの本貫地を経営していった。室町時代後半になると、一族の中で山内上杉氏と扇谷上杉氏の内紛が起こった。その隙間をぬって扇谷上杉氏領である相模の後北条氏が台頭する。三者の会戦であった天文14年(1545年)から翌年にかけての河越合戦に敗れた山内上杉憲政は、上野国平井城(藤岡市平井)まで後退する。さらに、天文21年(1552年)北条氏康に平井城を攻められ、長尾景虎を頼り、越後へ下った。そのため、上杉氏は上野国での基盤を失ってしまった。

上杉氏退去後の上野国は、後北条氏の勢力が浸透した。武田氏は、当時同盟していた後北条氏を支援するため吾妻郡へと進出。長尾景虎は、上杉憲政から家督を譲られ上杉謙信となり、関東へ侵攻する。上杉氏と武田氏の戦いは川中島の合戦が有名であるが、中之条町域でも軍事衝突が起きている。それが嵩山城をめぐる攻防、嵩山合戦である。岩櫃城を中心に吾妻郡を治めていた吾妻氏(斎藤憲広)は永禄６年(1563年)武田氏配下の真田幸隆に攻められる。吾妻氏は元々上杉氏被官の国人であり、上杉



第４図　周辺遺跡位置図(国土地理院発行地形図１：50,000「中之条」「四万」使用)

第１表　主な周辺遺跡

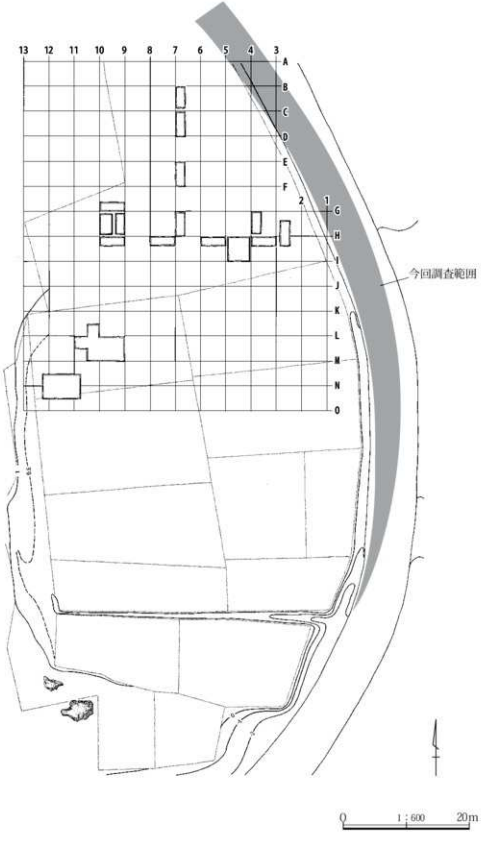
No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世近世	備考	文献
1	四万遺跡		○					本遺跡、昭和47年調査	本報告書
2	五輪平遺跡		○	○	○	○	○		14
3	入道城						○		7
4	久森遺跡		○					縄文時代中期	8・16
5	伊賀野遺跡		○					縄文時代前期の住居２軒	17
6	天狗山城						○	16世紀	7
7	内山城址						○		21・24
8	折田屋敷						○		7
9	桑田城址						○		21・24
10	清水敷石住居跡		○					後期	8・14
11	吉城						○		7
12	山田古城						○		7
13	高野平城						○	16世紀	7
14	成田遺跡			○				弥生時代中期住居に伴う地床炉	9・26
15	千貫屋敷		○	○			○	16世紀	14
16	嵩山城						○		7
17	長久保遺跡				○				26
18	法満寺上師遺跡				○			遺物散布地。	6・26
19	法満寺遺跡			○				遺物散布地。	6・26
20	城峰城						○	中之条町指定史跡。16世紀。堀切、土居、腰郭、戸口などが良好な状態で残る。	8・20・24
21	伊勢町遺跡			○					22
22	上原遺跡				○	○	○	古墳時代～平安時代の集落。竪穴住居、掘立柱建物などを調査。	22
23	天神遺跡		○	○	○	○	○	弥生時代～平安時代の集落。竪穴住居、古墳時代水田などを調査。古代には多くの掘立柱建物があり、奈良三彩や銅印が出土することなどから豪族居宅・官衙が存在した可能性が指摘されている。	22
24	川端遺跡			○	○	○		弥生時代～平安時代の集落。竪穴住居、弥生時代の壺棺墓、古墳時代の祭祀跡、古墳時代後期～古代の石垣遺構などを調査。	22
25	長岡遺跡			○	○	○		弥生時代～平安時代の集落。竪穴住居、掘立柱建物などを調査。	18・19
26	中条城(吾妻城)						○	16世紀。堀切、腰郭。文献８は東南部と西北部は別城と推定し、東南部は岩櫛城の出城とする。	7・24
27	永田原遺跡		○		○			散布地。古墳(『綜覧』中之条町38号墳)も存在。	3・6・26
28	石ノ塔古墳				○			中之条町指定史跡。板石を用いた竪穴式石槨。直刀、刀子、鉄鏃、鉄斧、人骨出土。５世紀か。	6・12・14・20・26
29	小川古墳群				○			中之条町指定史跡。『綜覧』中之条町25 ～ 28・31 ～ 34号墳、円墳４基現存。	3・14・20・26
30	稲荷城						○	文献８は戦国中期と推定。堀、土居、戸口、竪堀。	7・24
31	大宮遺跡				○			遺物散布地。	6・26
32	中学校裏遺跡			○				遺物散布地。	6・26
33	原町陣屋						○	岩櫛城破却後、真田信幸が設置という。17世紀	7
34	下郷古墳群		○	○	○	○			13・25
35	金井廃寺					○		町指定史跡。７世紀後半創建の寺院。多数の礎石が残存。創建瓦は伊勢崎市上植木廃寺と同笵。	1・2・13
36	小田沢の峠						○	安楽寺跡。16世紀	7

謙信の加勢を得て嵩山城に入城した。永禄８年(1565年)、真田幸隆は、嵩山城の総攻めを行った。両軍激しく戦ったが、嵩山城は落城。吾妻郡は武田氏の支配下となった。

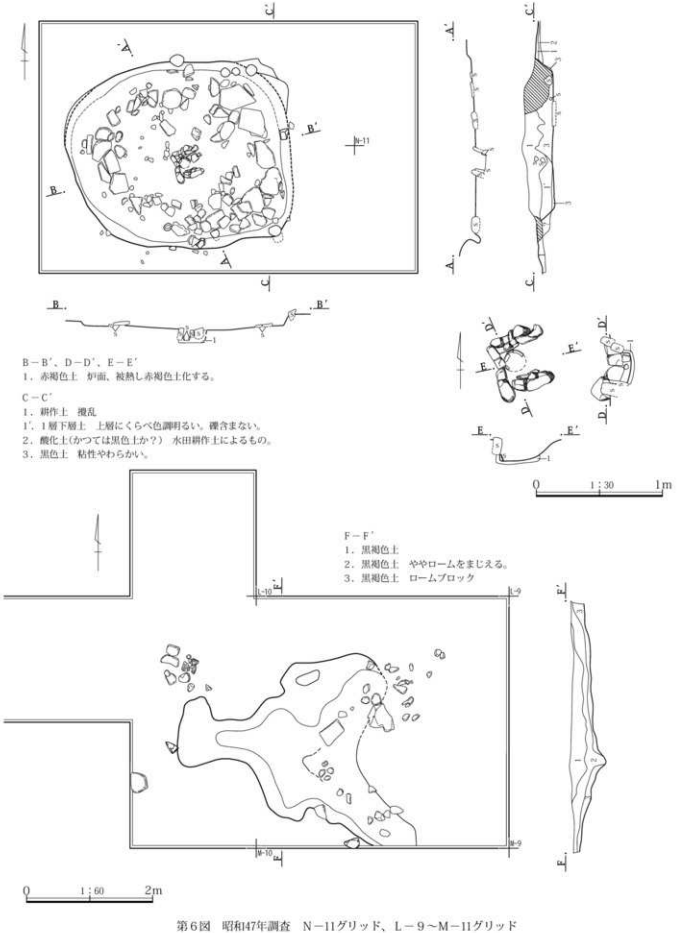
上杉謙信が没すると、相続争いである御館の乱がおこり、上杉景勝と武田勝頼の間に甲越同盟が結ばれた。これにより、武田氏の西上州支配が認められた。武田氏滅亡後は、真田氏が、後北条氏の侵攻を受けながらも、吾妻郡を支配していった。

江戸時代に入り、中之条地域はそのまま真田氏の所領となった。沼田藩真田氏が改易されると、天領となり、幕末を迎えた。吾妻郡で、近世の遺跡というと、天明３年(1783年)浅間山噴火に伴う泥流に埋もれた遺跡群がある。近年、八ツ場ダム建設関連の発掘調査により、その姿が明らかになってきている。長野原町では、東宮遺跡・西宮遺跡・町遺跡などで、屋敷跡及び付随する生活具等が発見されている。しかし、中之条町域では、調査事例が少ない。

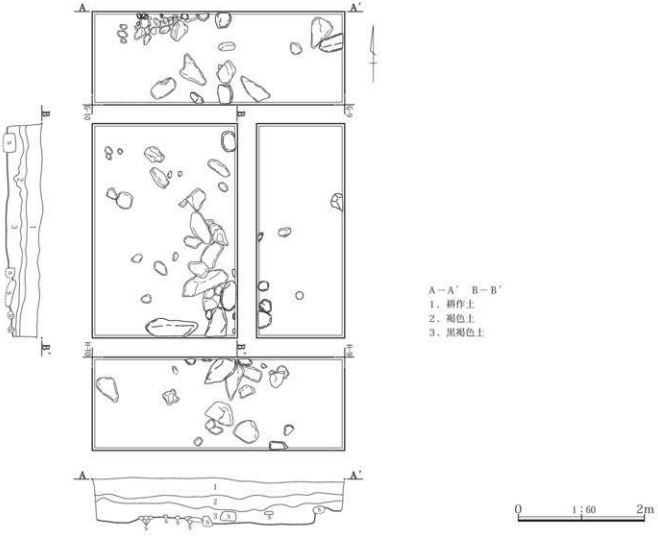
第２章参考文献
1　吾妻町 1960『原町誌』
2　吾妻町教育委員会 1979『金井廃寺遺跡』
3　群馬県 1938『上毛古墳綜覧』
4　群馬県 2003『土地分類基本調査・中之条』
5　群馬県 2004『土地分類基本調査・四万・岩菅山』
6　群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳』Ⅱ(西毛編)
7　群馬県教育委員会 1989『群馬県の中世城館跡』
8　群馬県史編さん委員会 1980『群馬県史』資料編１
9　群馬県史編さん委員会 1986『群馬県史』資料編２
10　群馬県史編さん委員会 1989『群馬県史』通史編３
11　群馬県史編さん委員会 1990『群馬県史』通史編１
12　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『群馬遺跡大辞典』上毛新聞社
13　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2014『下郷古墳群』
14　中之条町役場 1976『中之条町誌第１巻』
15　中之条町役場 1978『中之条町誌第３巻』
16　中之条町教育委員会 1985『上沢渡遺跡群』
17　中之条町教育委員会 1989『下沢渡伊賀野遺跡』
18　中之条町教育委員会 1996『長岡Ⅰ遺跡』
19　中之条町教育委員会 1996『長岡Ⅱ遺跡』
20　中之条町教育委員会 2003『中之条町の文化財』
21　中之条町教育委員会 2012 中之条町指定史跡「内山城址　桑田城址」
22　中之条町教育委員会・中之条町歴史民俗資料館 1993『出土品に見る古代の文化伊勢町地区遺跡群埋蔵文化展』
23　中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」2013『常設展示解説図録(追録付)』
24　山崎一 1972『群馬県古城塁址の研究 下巻』群馬県文化事業振興会
25　山下工業株式会社 2011『東吾妻町　下郷古墳群遺跡』
26　マッピングぐんま　遺跡・文化財(2014年２月のデータを使用)



第５図　昭和47年調査　全体図

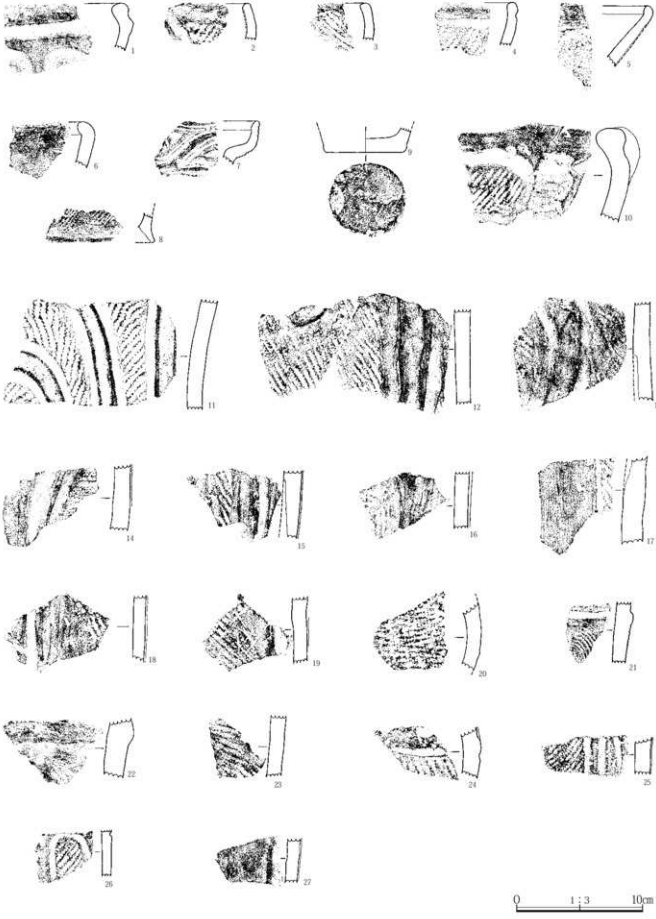


第６図　昭和47年調査　Ｎ－11グリッド、Ｌ－９～Ｍ－11グリッド

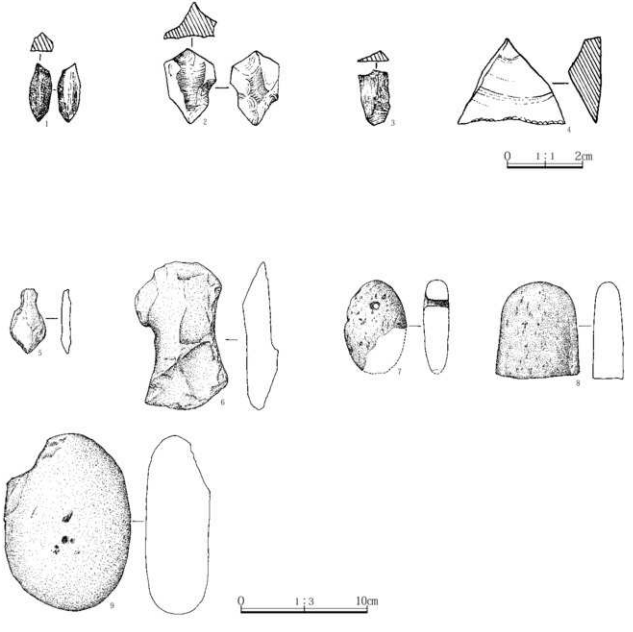


第７図　昭和47年調査　Ｇ－９～Ｈ－10グリッド

第８図　昭和47年調査　出土遺物（１）



第９図　昭和47年調査　出土遺物（２）



第10図　昭和47年調査　出土遺物（３）

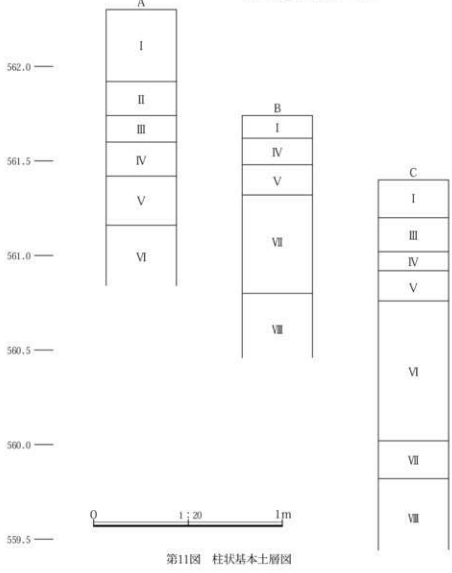
第３節　基本土層

基本土層は３カ所で確認をした(第12図)。基本土層は以下の通りである。

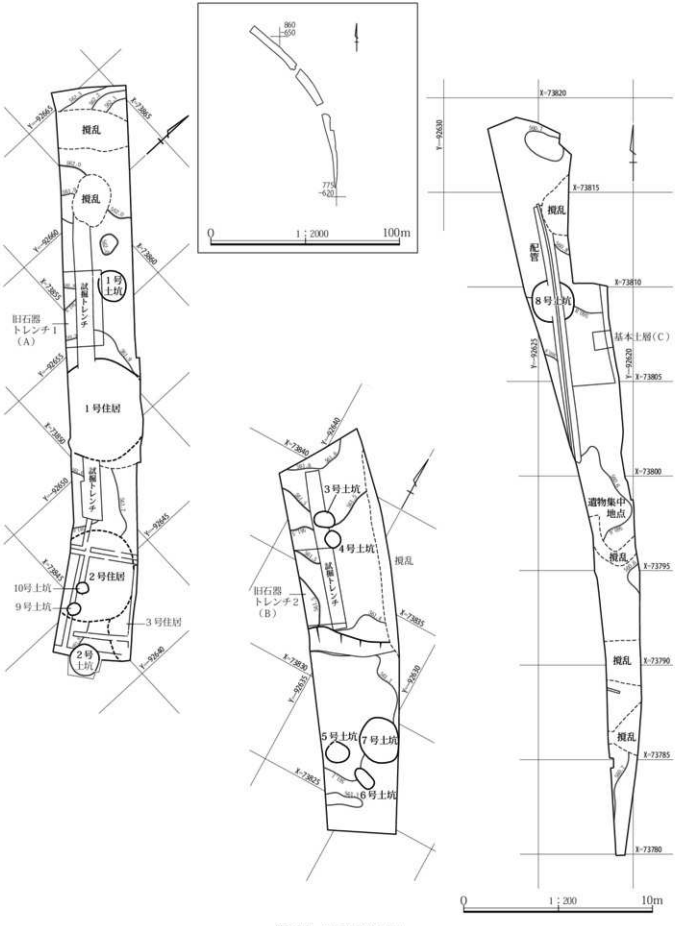
Ⅰ層　表土。
Ⅱ層　褐色土、旧表土。耕作土。
Ⅲ層　黒褐色土、包含層。
Ⅳ層　黒褐色土、調査確認面。
Ⅴ層　黄橙色土、ソフトローム層。
Ⅵ層　黄橙色土、２次堆積ローム層、砂質土。
Ⅶ層　黄橙色土、２次堆積ローム層、円礫含む。
Ⅷ層　にぶい黄橙色土、砂礫層、丸礫含む。

四万遺跡は、Ⅳ層黒褐色土を確認面として、調査を行った。この層から縄文時代の遺構が検出された。Ⅲ層土中からは縄文時代の遺物が出土した。このことから、黒褐色土は縄文時代を通じて形成された土層と考えられる。Ⅱ層はＡ地点のみで確認された旧耕作土である。四万遺跡は、弥生時代以降に形成された堆積土が削平されているものと考えられる。遺構確認面の下層にはローム土が堆積していた。Ａ～Ｃの地点ではローム層中の礫が確認されなかったが、１号住居床下面・２号土坑底面からは礫が出土している。部分的に礫が堆積していたようである。Ⅵ層・Ⅶ層土は、下層部(Ⅶ層)中に円礫を含む砂質土である。二次堆積ローム層と推定したが、堆積起因は不明である。

遺構調査終了後、Ａ・Ｂ地点にて２ｍ×４ｍのトレンチを設定し、旧石器時代確認調査を行った。遺構・遺物とも発見されなかった。



第11図　柱状基本土層図



第12図　四万遺跡全体図

第３章　検出された遺構と遺物

１．調査の概要

四万遺跡では、縄文時代遺構の調査を行った。表土下から確認された遺構が縄文時代のものであり、弥生時代以降の遺跡は、近代の所作と考えられる土地利用により、破壊されてしまったと考えられる。

検出された遺構は、住居３軒・土坑10基であった。以下、それぞれの遺構について、報告する。

２．敷石住居

敷石住居は３軒調査した。調査区が狭小であり、すべて住居は全体が調査区外に延びたため、全体の露呈は不能であった。１号住居・２号住居の形態及び出土遺物から、縄文時代中期後半の所産であることが判明した。３号住居は、出土遺物は得られなかったが、住居の形態から１号・２号住居と同時期と判断される。以下、それぞれの住居について、報告する。

１号住居(第13～17図、ＰＬ.２・３・７・８)

位置　Ｘ＝73850～73855、Ｙ＝-92649～-92654

方位　N-20°-E

規模　長軸(5.20)m、短軸(5.22)m、壁高0.52mを測る。

面積　(15.53㎡)

形状　柄鏡形敷石住居。主体部は六角形状を呈すが、連結部の石囲い施設等から調査区外に張出部が付属すると考えられる。

重複　なし。

床面　板状の敷石が付属すると考えられる。敷石は、扁平な亜角礫を用い、主柱穴(Ｐ１～Ｐ５＋α)により囲まれる内側に沿う状態で、五角形状に敷設されたと考えられるが、残存していたのはＰ２－Ｐ５を結んだ南西側の部分だけであった。床は、土層断面観察から黒褐色土・にぶい黄褐色土で貼り床されていたと言える。

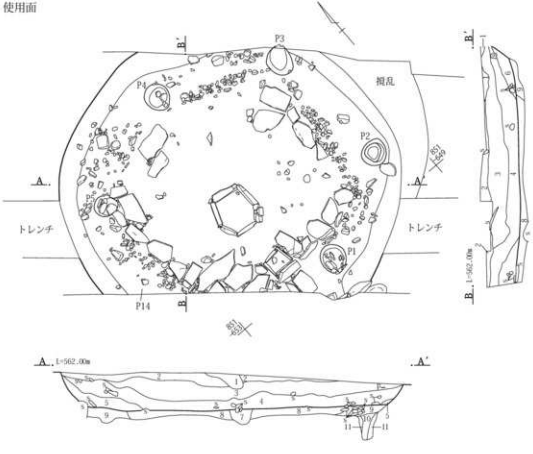
炉　炉跡は、住居内中央部から若干南側に寄った位置に備えている。炉の構造は、主材７枚の扁平礫を用いた石囲い炉である。平面形状は六角形状を呈する。炉石は、隅丸正方形状の掘り方の内に、北側を先に据え、南側方向に向かい据えている。石材はほぼ直状態である。内部の埋没土からは焼土・炭化物が確認された。炉石内面の被熱による色彩変化及び礫の剥離は確認されなかった。

柱穴　１号住居からは16基のピットが検出された。ピットの大きさは第２表の通りである。16基のうち、その位置や規模から、廃絶時に使用されていた主柱穴は、１号ピット・２号ピット・３号ピット・４号ピット・５号ピット・14号ピットと考えられる。１号ピットと２号ピットの距離は1.76m、２号ピットと３号ピットの距離は2.09m、３号ピットと４号ピットの距離は2.00m、４号ピットと５号ピットの距離は1.88m、５号ピットと14号ピットの距離は1.45mである。それ以外にも、断面形状から、６号ピット・７号ピット・11号ピット・12号ピットは柱穴と考えられる。第13図断面から、貼り床は、７号ピットを埋め戻して、構築されており、本住居は建て替えられていた可能性が考えられる。

周礫　住居北壁・北側から南東側にかけての敷石外側及び西側から南西側にかけての敷石外側に周礫が残る。周礫は、土層断面から、貼り床直上及び、貼り床下面で見られる。貼り床下面の周礫は、建て替え前に使用されていた周礫と想定される。建て替え後、貼り床し、貼り床の面で周礫を構築したのであろう。石囲い施設南側から東側にかけて、礫が立つように据えられていた。これは、周礫に伴う施設で、周礫に盛った土が住居内に流れるのを防ぐのを目的としたと考えられる。

連結部　調査した範囲では、明確な連結部が確認されなかった。住居南端部では方形石囲い施設が検出されている。石囲い施設は、長軸0.61m・短軸0.33m・深さ0.07mを測る。方形石囲い施設南側からは長軸(1.60)m、短軸(0.89)m、深さ0.51mの１号床下土坑が確認されている。土層断面(Ｆ－Ｆ′)から、この土坑を埋め戻して方形石囲い施設を構築したとみられる。本住居の敷石は、方形石囲い施設を起点に炉を囲むように敷設されている。方形石囲い施設南東部周辺の壁は、Ｐ２からＰ１側

使用面



1．カクラン層
2．黒褐10YR3/1　砂質土、φ20～100mm丸礫・炭化物２％含む。しまり弱、粘性弱。
3．黒褐10YR3/2　砂質土、暗褐色砂質土ブロックφ20～40mm２％・炭化物３％含む。しまり弱、粘性弱。
4．黒褐10YR3/2　砂質土、暗褐色砂質土ブロックφ20～40mm３％・炭化物３％・焼土ブロックφ20～40mm２％・黄橙色ロームブロックφ50mm１％含む。しまりやや強、粘性弱。
5．黒褐10YR3/2　砂質土、暗褐色砂質土ブロックφ20～40mm５％・φ20～100mm丸礫３％・炭化物２％含む。しまり弱、粘性弱。
6．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色ロームブロックφ30～50mm10％・炭化物１％含む。しまり弱、粘性弱。
7．黒褐10YR2/3　砂質土、黄橙色ロームブロックφ10～30mm20％・炭化物10％含む。しまり強、粘性弱、炉の掘り込みの一部。
8．黒褐10YR2/3　砂質土、黄橙色ロームブロックφ10～30mm10％・炭化物10％含む。しまり強、粘性弱、床層。
9．にぶい黄褐10YR4/3　砂質土、φ50～100mm礫20％・黄橙色ロームブロックφ10～30mm・10％・炭化物５％含む。しまりやや強、粘性弱。
10．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色ロームブロックφ10～30mm10％含む。しまり弱、粘性弱Pit７覆土。
11．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色ロームブロックφ10～30mm20％含む。しまり弱、粘性弱Pit７覆土。

0　1:60　2m

第13図　１号住居（１）

第２表　１号住居ピット計測値一覧

ピット番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	ピット番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
1	0.54	(0.40)	0.30	9	0.35	0.29	0.32
2	0.42	0.36	0.14	10	(0.25)	0.37	0.29
3	(0.44)	0.43	0.45	11	0.37	0.34	0.58
4	(0.45)	0.68	0.41	12	0.45	0.41	0.67
5	0.60	0.55	0.46	13	0.41	0.38	0.18
6	0.40	0.37	0.55	14	0.46	0.39	0.32
7	0.39	0.33	0.37	15	(0.16)	(0.15)	0.25
8	0.45	0.39	0.24	16	0.46	0.32	0.22

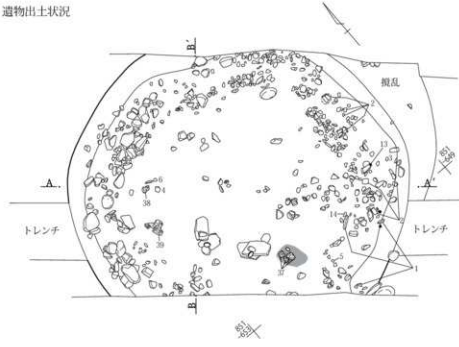
に延びる壁下端が、Ｐ１部分で外側に屈曲する様子を呈し、屋外方向に延びる状態である。方形石囲い施設の南側で、調査区界壁部分での覆土の状態は、壁際に堆積する状態とは異なり、むしろ屋内側で堆積する覆土の状態に類似する。このことは、壁が更に南側方向に向かい延びることを示唆している。方形石囲い施設の南西部分の敷石状態を併せて勘案すれば、当該住居は、柄鏡形である可能性が濃厚であると言える。

張出部　連結部の状況から、柄鏡形住居張出部が、住居南側の調査区外にあると推定される。

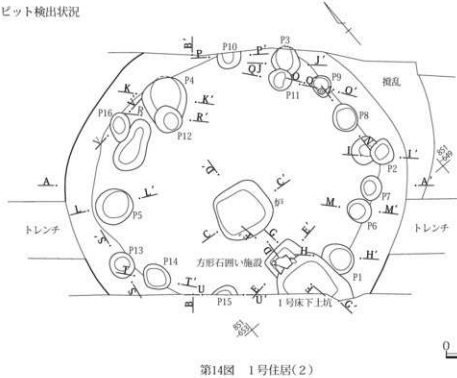
埋没土　黒褐色土、灰黄褐色土が堆積している。黒褐色土中から炭化物・焼土・礫が出土しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物　土器・石器・炭化材が出土している。土器は、加曽利Ｅ４式土器80点、焼町式土器１点が出土しており、加曽利Ｅ４式土器８点を図示した。図示した縄文土器は

遺物出土状況

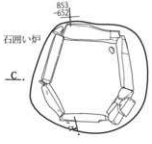


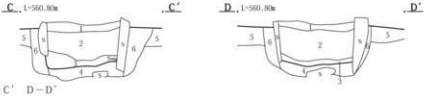
ピット検出状況



0　1:60　2m

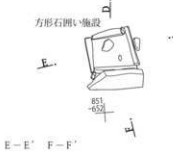
第14図　１号住居（２）

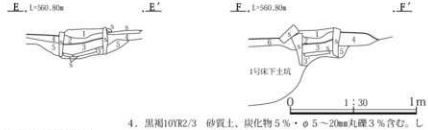




C－C′　D－D′

1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～50mm５％・炭化物３％含む。しまり弱、粘性弱。
2．黒褐10YR3/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～30mm３％・炭化物10%含む。しまり弱、粘性弱。
3．黒褐10YR3/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ20～50mm10％・炭化物５％・焼土粒５％含む。しまり弱、粘性弱。
4．黒褐10YR2/3　砂質土、φ20～50mm丸礫10％・炭化物７％含む。しまりやや強、粘性弱、使用面。
5．黒褐10YR3/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～30mm10％含む。炭化物10%含む。しまり強、粘性弱、床層。
6．にぶい黄褐10YR4/2　砂質土、φ10～40mm丸礫20％・炭化物３％含む。しまり強、粘性弱。

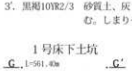




E－E′　F－F′

1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、焼土粒10%・炭化物５％含む。しまり弱、粘性弱。
2．黒褐10YR3/2　砂質土、炭化物５％・焼土粒３％含む。しまり弱、粘性弱。
3．黒褐10YR2/3　砂質土、灰７％・φ５～10mm焼土粒７％・炭化物７％含む。しまりやや強、粘性弱　使用面。
3′．黒褐10YR2/3　砂質土、灰７％・φ５～10mm焼土粒７％・炭化物２％含む。しまりやや強、粘性弱２％含む。
4．黒褐10YR2/3　砂質土、炭化物５％・φ５～20mm丸礫３％含む。しまり強、粘性弱。
5．にぶい黄褐10YR4/3　砂質土、φ５～20mm丸礫３％含む。しまりやや強、粘性弱。
6．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～20mm５％・炭化物３％含む。しまり弱、粘性弱。

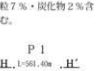
1号床下土坑



G－G′

1．黒褐10YR2/3　砂質土、灰７％・φ５～10mm焼土粒７％・炭化物７％含む。しまりやや強、粘性弱、石囲い施設埋土。
2．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～20mm５％・炭化物３％含む。しまり弱、粘性弱。
3．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～20mm10％・炭化物３％含む。しまり弱、粘性弱。
4．灰黄褐10YR4/2　砂質土、φ５～100mm丸礫10％・黄褐色ロームブロックφ10～20mm２％含む。しまり弱、粘性弱。

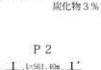
P 1



H－H′

1．にぶい黄褐10YR4/3　砂質土φ20～70mm丸礫10％・炭化物２％含む。しまり弱、粘性弱。

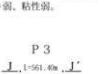
P 2



I－I′

1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～40mm５％炭化物１％含む。しまり弱、粘性弱。
2．灰黄褐10YR5/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ30～100mm30%含む。しまり弱、粘性弱。

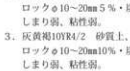
P 3



J－J′

1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～40mm５％・炭化物１％含む。しまり弱、粘性弱。
2．にぶい黄褐10YR4/3　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～30mm10%含む。しまり弱、粘性弱。
3．灰黄褐10YR5/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ30～100mm30%含む。しまり弱、粘性弱。

P 4



K－K′

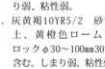
1．灰黄褐10YR5/2　砂質土、φ20～50mm丸礫10％・黄褐色ロームブロックφ10～20mm２％・炭化物２％含む。しまり弱、粘性弱。
2．灰黄褐10YR4/2　砂質土、しまり弱、粘性弱、混入物なし。
3．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ20～100mm20%含む。しまり弱、粘性弱。

P 5

L－L′

1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、φ20～50mm丸礫10％・炭化物２％含む。しまり弱、粘性弱。
2．灰黄褐10YR4/2　砂質土、炭化物３％含む。しまり弱、粘性弱。
3．にぶい黄褐10YR4/3　砂質土、褐色土ブロックφ10～20mm５％含む。しまり弱、粘性弱。

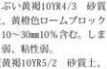
P 6



M－M′

1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～40mm５％炭化物１％含む。しまり弱、粘性弱。
2．にぶい黄褐10YR4/3　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～30mm10%含む。しまり弱、粘性弱。

P 8

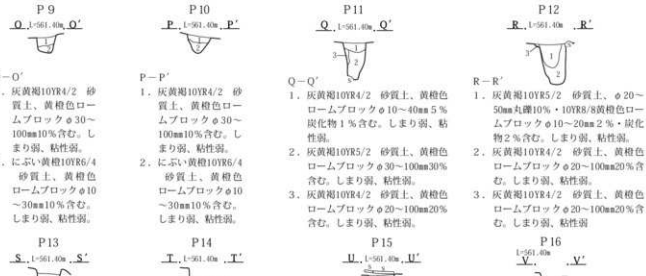


N－N′

1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色ロームブロックφ30～100mm10%含む。しまり弱、粘性弱。
2．にぶい黄褐10YR6/4　砂質土、黄褐色ロームブロックφ10～30mm10%含む。しまり弱、粘性弱。

0　1：60　2m

第15図　1号住居(３)



第16図　１号住居（４）

いずれも住居中心部ではなく、壁際から出土している。第17図５は床面直上、第17図６は床下から出土しており、他の縄文土器は埋土中から出土している。石器は14点出土した。すべて剥片石器であった。出土した石器の石材は、黒曜石・珪質頁岩・細粒輝石安山岩・黒色安山岩・黒色頁岩・チャート・変質安山岩であった。多種の石材が利用されていた。出土した石器のうち７点を図示した。図示したのは石鏃・石錐・楔形石器・打製石斧・磨製石斧である。第17図13の磨製石斧は、住居東側壁際の埋土中より出土し、丁寧な研磨で仕上げられており、顕微鏡観察の結果、刃部に摩滅がなく、使用した痕跡は認められなかった。炭化材・焼土が住居内よりまばらに確認されている。特に、石囲い施設埋土、西壁際からは炭化材がまとまって出土している。材はクリが利用されていた。（分析成果は４章にて述べる。）

所見　狭小な調査区のため、住居の一部分しか調査されなかったが、主体部が六角形となる柄鏡形敷石住居である。出土している土器から、この住居の使用時期は縄文時代中期後半と考えられる。

２号住居（第18・19図、ＰＬ．４・８）

位置　Ｘ＝73844 ～ 73849、Ｙ＝-92643 ～ -92647

方位　Ｎ-36°-Ｅ

規模　長軸(4.79)m、短軸(3.58)mを測る。表土直下から床面が検出されたため、壁高は不明。

面積　(14.60㎡)

形状　敷石の並びから、楕円形もしくは柄鏡形を呈するものと考えられる。

重複　３号住居・９号土坑・10号土坑。新旧関係は不明。

床面　住居北側部分で敷石が残存していた。検出された敷石の位置から住居プランを推定した。

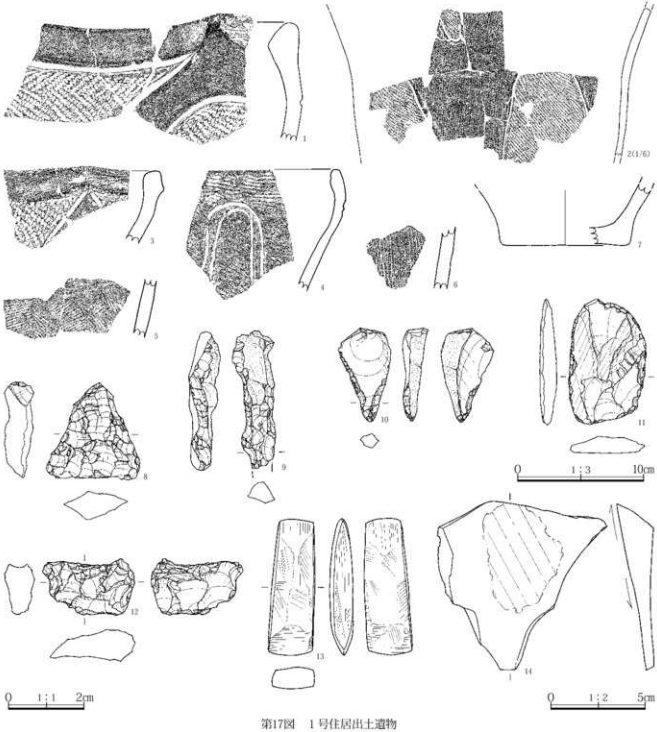
炉　長軸1.13m、短軸1.04m、深さ0.06mを測る楕円形状の落ち込みが、住居中心部分にて確認されている。焼土等は確認されていないが、位置から炉と考えられる。

柱穴　確認されなかった。

周礫　住居北東部分から小礫が確認されている。敷石と見られる礫の外側より確認されているため、周礫に使用されていた礫と考えられる。周礫を築いていたと推定されるが、規模等は不明である。

埋没土　表土直下から、床面が確認されているため不明である。

出土遺物　田戸上層式土器１点、加曽利Ｅ３式土器１点、加曽利Ｅ４式土器８点、阿玉台式土器２点が出土している。そのうち田戸上層式土器１点、加曽利Ｅ３式土器１点、加曽利Ｅ４式土器１点、阿玉台式土器２点を図示した。図示した土器はいずれも埋土中からの出土であった。



第17図　1号住居出土遺物

所見　表土直下にて検出された住居であり、床面の状況のみの確認であった。床面直上から大振りな礫が出土しており、敷石住居であったと考えられる。出土した土器から、他の遺構と同様縄文時代中期後半の遺構と想定される。前期田戸上層式土器が出土しているが、1点のみの出土であり、他の出土遺物の状況から、この住居に伴うものではないであろう。

3号住居(第18図、P L.4)

位置　X＝73844～73847、Y＝-92640～-92643

方位　N-32°-E

規模　長軸(4.02)m、短軸(1.29)mを測る。表土直下から床面が検出されたため、壁高は不明。

面積　(3.00㎡)

形状　敷石の並びから、楕円形もしくは長方形を呈するものと考えられる。

重複　２号住居。新旧関係は不明。

床面　敷石と考えられる礫が残存していた。検出された敷石の位置から住居プランを推定した。

炉　確認されなかった。

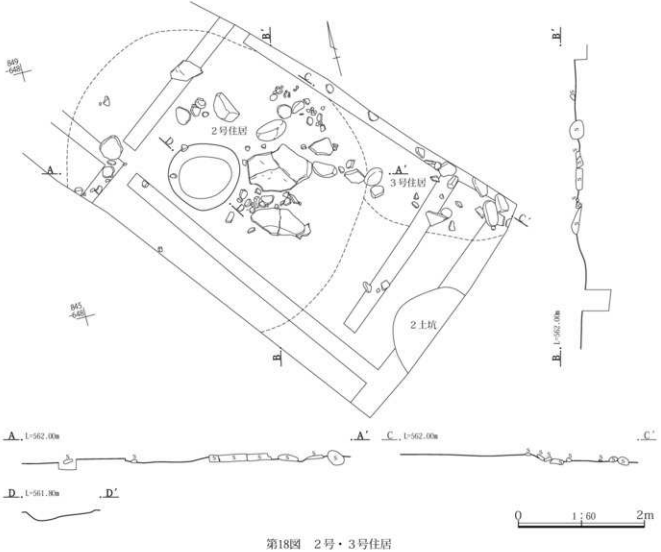
柱穴　確認されなかった。

周礫　確認されなかった。

埋没土　表土直下から、床面が確認されているため不明である。

出土遺物　確認されなかった。

所見　表土直下にて検出された住居である。２号住居と重複しており、調査当初は２号住居が柄鏡形のプランであり、張出部と想定されたが、出土した礫の配置より、連結部ではなく別の遺構であると判断した。遺物が出土されなかったため、時期は不明であるが、他の住居と同様の形態から、縄文時代中期後半の遺構であると考えられる。



第18図　２号・３号住居

第19図　２号住居出土遺物

3．土坑

土坑は、円形もしくは円形に準ずる形状を呈している遺構を土坑とした。土坑は10基を調査した。以下、当該遺構について順次詳述する。遺構の時期は、出土遺物及び、他の遺構と確認面を同一にしていることから、縄文時代に帰属するものと考えられる。

１号土坑(第20・22図、ＰＬ.５・８)

位置　Ｘ＝73857 ～ 73858、Ｙ＝-92655 ～ -92656

形状・規模　平面形状は楕円形を呈し、長軸1.66m、短軸1.45mを測る。深さは0.19mであった。

方位　N-58°-W

重複　なし

埋没土　黒褐色土・灰黄褐色土が堆積している。埋没土中には、礫が堆積していた。

出土遺物　埋土中から縄文土器片が出土している。有尾式土器片が２点、加曽利Ｅ３式土器片が７点であった。有尾式土器深鉢及び加曽利Ｅ３式土器深鉢を図示した。有尾式土器深鉢は２点図示したが(第22図２・３)、同一個体であり、埋没土中から出土した。加曽利Ｅ３式土器深鉢は底面から10cm ～ 18cm上から出土した。

２号土坑(第20・22図、ＰＬ.５・８)

位置　Ｘ＝73842 ～ 73844、Ｙ＝-92641 ～ -92643

形状・規模　平面形状は楕円形を呈し、長軸1.69m、短軸1.53mを測る。深さは0.52mであった。底面からは礫が出土しているが、これは地山、基本土層Ⅴ層中の礫であると考えられる。

方位　N-50°-W

重複　なし

埋没土　黒褐色土・暗褐色土・灰黄褐色土が堆積している。拳大から人頭大の礫が多数出土した。堆積状況及び礫の出土状況から、人為的な埋没が考えられる。

出土遺物　埋土中から縄文土器片が出土している。阿玉台Ⅰａ式土器１点・五領ヶ台式土器１点を図示した。阿玉台Ⅰａ式土器深鉢(第22図５)は、底面より10cm上から出土したが、横位で倒れているような出土状態であった。五領ヶ台式土器深鉢(第22図４)は、底面より23cm上から出土した。その他に、加曽利Ｅ３式土器片が１点出土している。

３号土坑(第20図、ＰＬ.５)

位置　Ｘ＝73837 ～ 73838、Ｙ＝-92637 ～ -92638

形状・規模　平面形状は楕円形を呈し、長軸1.12m、短軸0.83mを測る。深さは0.52mであった。

方位　N-79°-E

重複　なし

埋没土　黒褐色土が堆積している。埋没土中には、礫が堆積していた。

出土遺物　縄文時代中期とみられる土器片が、埋土中から２点出土している。

４号土坑(第20図、ＰＬ.５)

位置　Ｘ＝73836 ～ 73837、Ｙ＝-92636 ～ -92637

形状・規模　平面形状は楕円形を呈し、長軸0.93m、短軸0.80mを測る。深さは0.30mであった。

方位　N-39°-W

重複　なし

埋没土　黒褐色土・灰黄褐色土が堆積している。埋没土中には、礫が堆積していた。

出土遺物　なし

５号土坑(第20図、ＰＬ.６)

位置　Ｘ＝73826 ～ 73827、Ｙ＝-92631 ～ -92632

形状・規模　平面形状は楕円形を呈し、長軸1.25m、短軸1.09mを測る。深さは0.50mであった。

方位　N-63°-E

重複　なし

埋没土　黒褐色土・灰黄褐色土が堆積している。埋没土中には、礫が堆積していた。土層断面１層の堆積状況から、土坑の中央部分は後世に掘りなおされていると考えられる。

出土遺物　縄文時代中期とみられる土器片が、埋土中から１点出土している。

６号土坑(第20図、ＰＬ.６)

位置　Ｘ＝73826、Ｙ＝-92629 ～ -92630

形状・規模　平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸1.26m、短軸0.64mを測る。深さは0.37mであった。

方位　N-71°-W
重複　なし
埋没土　にぶい黄褐色土・暗褐色土・灰黄褐色土が堆積している。埋没土中には、礫が堆積していた。
出土遺物　縄文時代中期とみられる土器片が、埋土中から１点出土している。

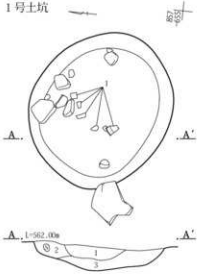
７号土坑(第21・22図、ＰＬ.６・９)
位置　Ｘ＝73827 ～ 73829、Ｙ＝-92628 ～ -92631
形状・規模　平面形状は楕円形を呈し、長軸2.40m、短軸2.01mを測る。深さは0.25mであった。
方位　N-37°-W
重複　なし
埋没土　灰黄褐色土・黒褐色土が堆積している。埋没土中には、礫が堆積していた。
出土遺物　埋土中から加曽利Ｅ３式土器片５点、五領ヶ台式土器片１点、五領ヶ台Ⅱ式土器片４点が出土している。加曽利Ｅ３式深鉢１点(第22図10)、五領ヶ台Ⅱ式深鉢４点(第22図６～９)を図示した。

８号土坑(第21・22図、ＰＬ.６・９)
位置　Ｘ＝73808 ～ 73810、Ｙ＝-92623 ～ -92625
形状・規模　平面形状は楕円形を呈し、長軸2.36m、短軸2.26mを測る。深さは0.65mであった。
方位　N-50°-W
重複　なし
埋没土　黒褐色土が堆積している。黒褐色土中には焼土が含まれており、土層断面１層中には焼土塊が含まれていた。埋没土中には、礫が堆積していた。
出土遺物　加曽利Ｅ３式土器片が、埋土中から24点出土している。そのうち深鉢４点(第22図11 ～ 14)を図示した。

９号土坑(第21図、ＰＬ.６)
位置　Ｘ＝73844 ～ 73845、Ｙ＝-92644 ～ -92645
形状・規模　平面形状は楕円形を呈し、長軸0.72m、短軸0.63mを測る。深さは0.38mであった。
方位　N-24°-E
重複　２号住居。新旧関係は不明である。
埋没土　灰黄褐色土が堆積している。
出土遺物　縄文時代中期とみられる土器片が、埋土中から１点出土している。

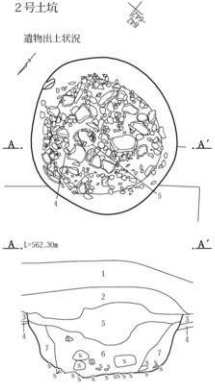
10号土坑(第21図、ＰＬ.６)
位置　Ｘ＝73845 ～ 73846、Ｙ＝-92645
形状・規模　平面形状は楕円形を呈し、長軸0.65m、短軸0.58mを測る。深さは0.28mであった。
方位　N-22°-E
重複　２号住居。新旧関係は不明である。
埋没土　灰黄褐色土が堆積している。
出土遺物　なし

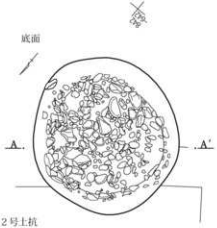
1号土坑



1号土坑
A－A′
1．黒褐10YR3/2　砂質土、黄橙色ロームブロックφ30～50mm10％・φ1mm以下の白色鉱物1％含む。しまり弱、粘性弱。
2．黒褐10YR3/1　砂質土、黄橙色ロームブロックφ10～20mm2％含む。しまり弱、粘性弱。
3．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色ロームブロックφ30～50mm40％含む。しまり弱、粘性弱。

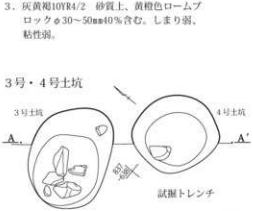
2号土坑





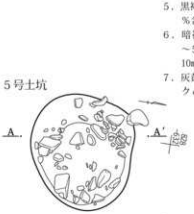
2号土坑
A－A′
1．褐灰10YR5/1　砂質土、表土、ごみ、礫等入る。しまり弱、粘性弱。
2．灰黄褐10YR5/2　砂質土、カクラン、しまり弱、粘性弱。
3．黒褐10YR3/1　砂質土、φ1mm以下の白色鉱物1％含む。しまりやや強、粘性弱、地山。基本土層Ⅳ層上。
4．黄橙10YR8/6　砂質土、ソフトローム層。3層の黒褐色土ブロックφ20～50mm10％含む。しまりやや強、粘性弱、地山。基本土層Ⅴ層上。
5．黒褐10YR3/2　砂質土、φ1mm以下の白色鉱物1％含む。しまりやや強、粘性弱。
6．暗褐10YR3/2　砂質土、褐色土ブロックφ20～50mm20％・黄橙色ロームブロックφ5～10mm2％含む。しまりやや強、粘性弱。
7．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色ロームブロックφ20～100mm30％含む。しまり弱、粘性弱。

3号・4号土坑



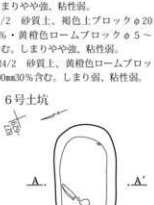
3号・4号土坑
A－A′
1．黒褐10YR3/2　砂質土、にぶい黄褐色土ブロックφ30～50mm、10％・φ1mm以下の白色鉱物1％含む。しまり弱、粘性弱。
2．黒褐10YR3/2　砂質土、黄橙色ロームブロックφ50～100mm30％・φ1mm以下の白色鉱物1％含む。しまり弱、粘性弱。
3．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色ロームブロックφ30～50mm20％・φ1mm以下の白色鉱物1％含む。しまり弱、粘性弱。
4．黄褐10YR3/1　砂質土、φ1mm以下の白色鉱物1％含む。しまりやや強、粘性弱。地山。基本土層Ⅴ層上。

5号土坑



5号土坑
A－A′
1．黒褐10YR3/2　砂質土、φ5mm褐色土粒2％・φ1mm白色鉱物1％含む。しまり弱、粘性弱。
2．黒褐10YR2/2　砂質土、φ1mm白色鉱物1％・褐色土粒φ5mm1％含む。しまり弱、粘性弱。
3．暗褐10YR3/4　砂質土、φ1mm白色鉱物1％含む。しまり弱、粘性弱。
4．黒褐10YR2/2　砂質土、φ1mm白色鉱物1％。しまりやや強、粘性弱。
5．黒褐10YR2/3　砂質土、10YR8/8黄橙色ロームブロックφ20～50mm5％含む。しまり弱、粘性弱。

6号土坑

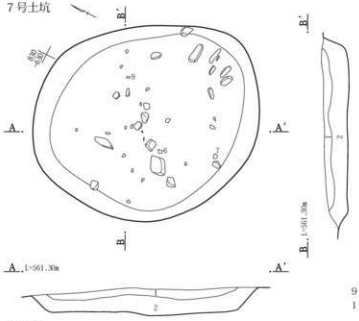


6号土坑
A－A′
1．にぶい黄褐10YR4/3　砂質土、黄褐色土ブロックφ30～100mm30％・炭化物1％・焼土粒1％含む。しまり弱、粘性弱。
2．暗褐10YR3/3　砂質土、黄褐色土ロームブロックφ20～50mm10％含む。しまり弱、粘性弱。
3．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄褐色土ロームブロックφ20～50mm2％・φ1～2mm白色鉱物1％。しまり弱、粘性弱。

0　1:40　1m

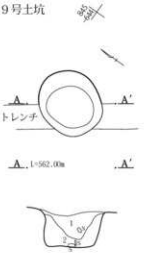
第20図　1号～6号土坑

7号土坑



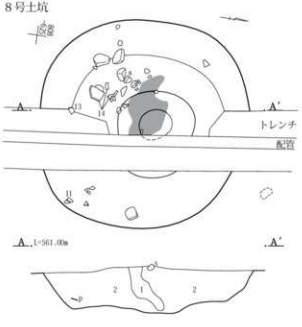
7号土坑
1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、褐色土ブロックφ20～40mm20％・白色鉱物φ１mm１％・焼土粒１％・炭化物１％含む。しまり弱、粘性弱。
2．黒褐10YR3/2　砂質土、褐色土ブロックφ20～40mm５％含む。白色鉱物φ１～２mm１％・炭化物１％含む。しまりやや強、粘性弱。

9号土坑



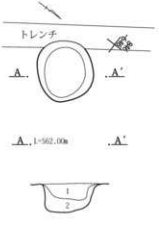
9号土坑
1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色土ロームブロックφ30～50mm５％・白色鉱物φ１mm１％含む。しまり弱、粘性弱。
2．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色土ロームブロックφ30～50mm20％・白色鉱物φ１mm１％含む。しまり弱、粘性弱。

8号土坑



8号土坑
1．黒褐10YR3/2　砂質土、焼土塊50％含む。しまり弱、粘性弱。
2．黒褐10YR3/2　砂質土、褐色土ブロックφ20～50mm５％・炭化物２％含む。しまりやや強、粘性弱。

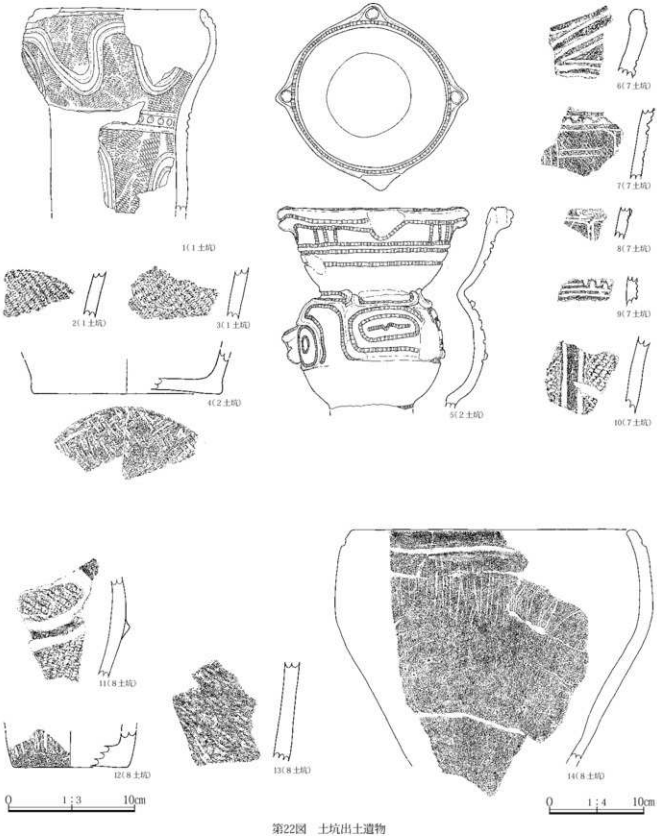
10号土坑



10号土坑
1．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色土ロームブロックφ30～50mm５％・白色鉱物φ１mm１％含む。しまり弱、粘性弱。
2．灰黄褐10YR4/2　砂質土、黄橙色土ロームブロックφ30～50mm20％・白色鉱物φ１mm１％含む。しまり弱、粘性弱。

0　1:40　1m

第21図　７号～ 10号土坑


1(1土坑)
2(1土坑)
3(1土坑)
4(2土坑)
5(2土坑)
6(7土坑)
7(7土坑)
8(7土坑)
9(7土坑)
10(7土坑)
11(8土坑)
12(8土坑)
13(8土坑)
14(8土坑)
0 1:3 10cm
0 1:4 10cm

第22図　土坑出土遺物

４．遺物集中地点・遺構外出土遺物

四万遺跡では、縄文時代の遺物が広く散布し、出土している。特に遺跡南部やや南端寄りの地点では、遺物が集中して出土しており、遺物集中地点とした。ここでは、遺物集中地点と、それ以外の遺構に供わない遺物について述べる。

遺物集中地点（第23～25図、ＰＬ.９・10）

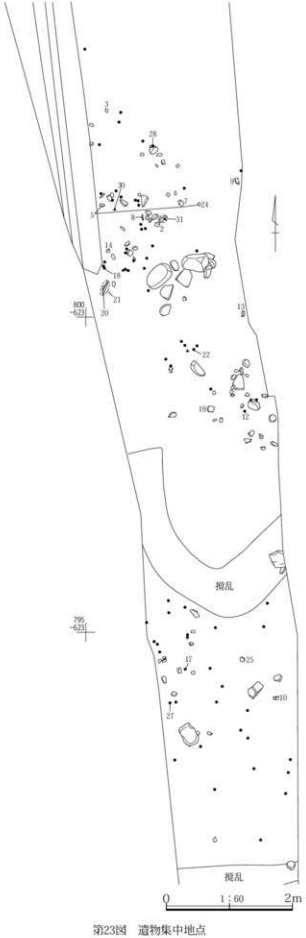
位置　北西隅Ｘ＝73804.5、Ｙ＝-92623　南東隅Ｘ＝73791.5、Ｙ＝-92619.7

概要　調査区南端、８号土坑南側の地点。東西約２ｍ、南北約13ｍほどの範囲に遺物が集中して散布していた。踏み固めや焼土等の散布は見られないが、Ｘ＝73801、Ｙ＝-92622付近では大振りな礫が直線的に並んでおり、住居床面の可能性も考えられる。

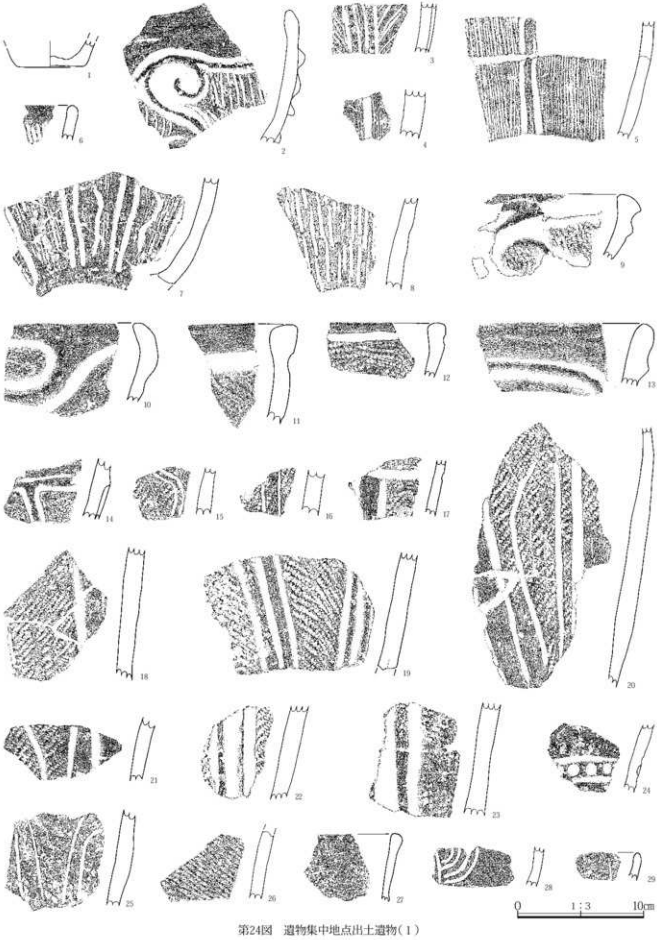
遺物　32点の遺物を図示した。縄文土器29点、石器３点である。縄文土器は第24図27の浅鉢を除き、深鉢片であった。図示した土器片は、縄文時代中期と見られるもの１点、郷土式３点、加曽利Ｅ２式２点、加曽利Ｅ３式18点、加曽利Ｅ４式２点、堀之内式２点であった。概ね縄文時代中期から後期にかけての土器であった。石器は３点図示した。石鏃・石斧・石製品の３点であるが、図示しなかった資料として、石核２点、剥片18点、二次加工ある剥片５点が出土している。

遺構外出土遺物（第26図、ＰＬ.10）

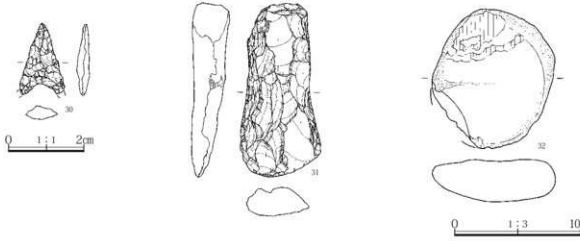
遺構に供わない遺物で、遺物集中地点以外から出土した遺物を一括して以下に記す。図示した遺物は14点である。縄文土器はすべて深鉢片である。五領ヶ台式３点、阿玉台式２点、加曽利Ｅ３式３点、加曽利Ｅ４式２点、堀之内式２点である。いずれも遺構に伴って出土している土器型式である。しかし、図示しなかったが前期諸磯ｃ式土器が１点出土していた。石器は、石鏃・削器それぞれ１点ずつ図示した。図示しなかった資料として、スクレイパー１点、剥片４点、二次加工ある剥片１点が出土している。



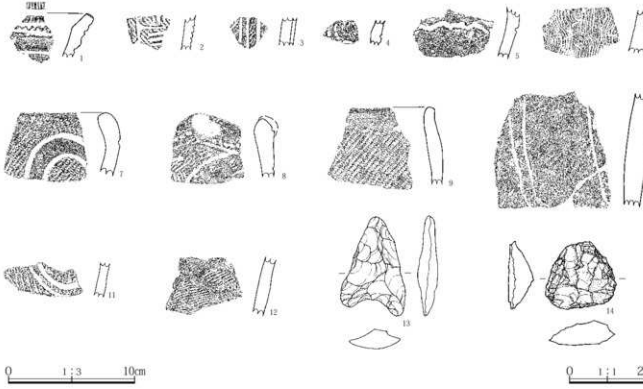
第23図　遺物集中地点



第24図　遺物集中地点出土遺物（1）



第25図　遺物集中地点出土遺物（２）



第26図　遺構外出土遺物

第４章　自然科学分析

第１節　分析の目的

四万遺跡の整理作業の中で、出土炭化材樹種同定を委託した。炭化材は、１号住居より出土した(第14図)。出土位置を記録し、炭化材に付着した土砂を丁寧に除去し、取り上げた。取り上げた炭化材は、当事業団保存処理室の関邦一により、顕微鏡観察が行われた。観察の結果、ほとんどがクリであった。しかし、当事業団にて鑑定結果が不明であった試料が３点あった。その３点について、パリノ・サーヴェイ株式会社へ分析委託し、報告を得た。

結果は３試料とも分割材状のクリであった。クリは腐りにくいという特色から建築部材に使われていたことが想定される。本遺跡出土の炭化材も、建設部材であった可能性が高い。出土した材は柱材・梁材などの住居主要建築部材であった可能性が考えられるが、長野原一本松遺跡５区60号住居と同様周礫付近で出土していることから、周礫に伴う構造物に使われていた部材であったことも考えられる。

第２節　出土炭化材樹種同定

１．試料

試料は、１号住居より出土した炭化材３点(No.37～39)である。これらの炭化材は、No.37が方形石囲い施設覆土(焼土)上位、No.38・39が住居内西～北西部の床面よりそれぞれ出土している。また、炭化材の観察では、いずれも分割材状を呈する。

２．分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

３．結果

分析に供された１号住居出土炭化材は、全て落葉広葉樹のクリに同定された(第３表)。以下に、クリの解剖学的特徴等を記す。

・クリ(*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*)　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３－４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－15細胞高。

４．考察

縄文時代中期後半(加曽利Ｅ４式)の１号住居より出土した炭化材３点(No.37～39)は、いずれも落葉広葉樹のクリに同定された。クリは、二次林などに生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。分析対象とされた炭化材のうち、床面出土試料(No.38・39)などは、出土位置やクリの強靱で腐りにくいという材質から、建築部材等に由来する可能性がある。また、本住居では、この他に出土した炭化材にはクリが多いという所見が得られていることから、クリを主体とした木材利用

第３表　樹種同定結果

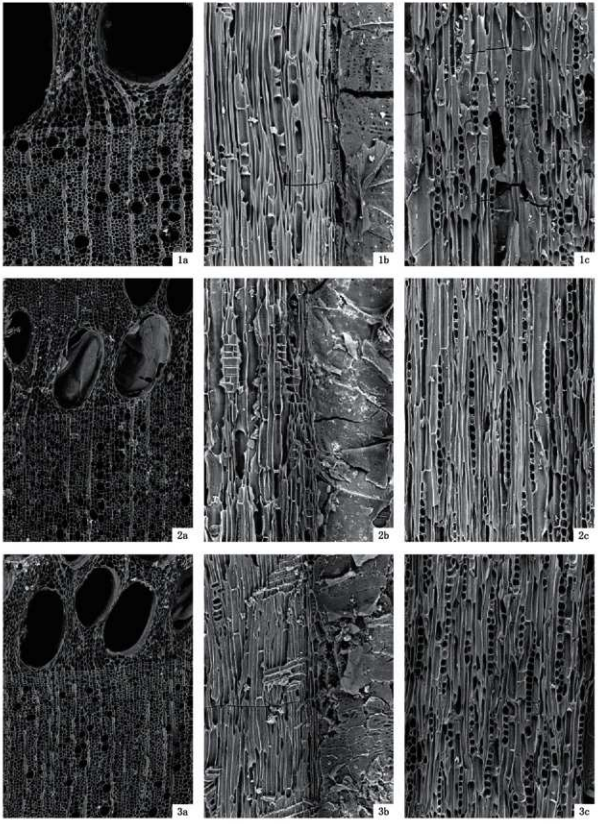
遺構	取上番号	状態	形状	種類(分類群)
１号住居	No.37	炭化材	分割材状	クリ
	No.38	炭化材	分割材状	クリ
	No.39	炭化材	分割材状	クリ

が窺える。

縄文時代のクリ材の利用については、千野(1983,1991)などにより指摘されている。群馬県内における縄文時代中期の事例についてみると、行幸田山遺跡(渋川市)の住居跡および住居炉内出土炭化材、藤岡北山Ｂ遺跡(藤岡市)の住居跡や土坑出土炭化材、吹屋中原遺跡(渋川市)の竪穴住居跡や住居炉内炭化材、道訓前遺跡(渋川市)の住居跡や土坑出土炭化材などにクリが認められている(伊東・山田,2012)。これらの分析対象とされた試料の大半をクリが占めていることから、今回と同様にクリを主体とする木材利用が指摘できる。

また、長野原一本松遺跡(長野原町)の縄文時代後期の柄鏡形敷石住居跡から出土した炭化材の調査においても、クリが主体となる結果(植田,2008)が得られており、縄文時代中期以降にも同様の木材利用があったことが示唆される。

引用文献
千野裕道,1983,縄文時代のクリと集落周辺植生.東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ,27-42.
千野裕道,1991,縄文時代に二次林はあったか　一遺跡出土の植物性遺物からの検討－.東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅹ,215-249.
林　昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学 木質科学研究所.
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,448p.
島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
植田弥生,2008,長野原一本松遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定.長野原一本松遺跡(４)八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24集,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第441集,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,269-275.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1. クリ(1号住居;№37)
2. クリ(1号住居;№38)
3. クリ(1号住居;№39)
　a:木口, b:柾目, c:板目

写真1　炭化材断面

第５章　調査成果のまとめ

第１節　柄鏡形敷石住居について

四万遺跡の調査については３章で報告した通りである。特に１号住居では、部分的とはいえ柄鏡形敷石住居の調査を行った。ここでは検出された敷石住居の特徴ともいえる周礫と方形石囲い施設について考察し、調査成果のまとめとしたい。

１．柄鏡形敷石住居について

群馬県内で確認されている敷石住居は、2000年段階の集成[註1]で133遺跡、336例である。執筆段階で、集成から14年経過しており、類例が増加しているが、地域及び時期別の分布状況の傾向は当時とあまり変わらないと考えられる[註2]。敷石住居の中でも、柄鏡形敷石住居とは、文字通り住居プランが柄鏡の形をしており、鏡の部分が円形乃至方形(多角形)を呈す主体部であり、柄状の細長い張出部が主体部に連結する住居である。群馬県内で確認されている敷石住居は、ほとんどが柄鏡形の住居プランを呈する。

２．周礫について

四万遺跡１号住居では、炉を中心として五角形に板石が敷かれていた。その外側には最大で15cm程度の小礫が、環状に盛られていた(第13図)。これが周礫(周縁部環状礫)である。

周礫は、県内の敷石住居調査例でも確認されている。2000年の集成段階[註3]で34例が認められている。時期別には加曽利Ｅ４式期５軒、称名寺式期20軒、堀之内式期８軒である。傾向として、称名寺式期に盛行したようである。

周礫の機能や性格については、住居構造の一部として機能していたとみる解釈と、住居廃棄に伴う祭祀的性格とみる解釈がある。本遺跡内での構造上の特徴について検討し、その機能について考えたい。

構造　周礫の構造については荒砥二之堰遺跡[註4]及び堤遺跡[註5]の調査報告書で詳述されている。荒砥二之堰遺跡では称名寺Ⅰ式期から堀之内１式期までの７軒の柄鏡形敷石住居が検出されている(第27図)が、すべての住居で周礫が認められている。その構造上の特徴として、「この周礫は、径５cm前後の小礫(土器片や石器含む)と土とを混合して、床面から高さ20～40cm、幅50cm前後の規模で盛り上げられ、各柱穴の配列とほぼ同一位置を帯状にめぐるものである」[註6]と述べている。また、周礫上面から柱穴が確認されているものや、周礫下に各柱穴を連結するような周溝状の掘り込みが確認された住居もあった。このことから、周礫下の溝に素材を埋め込む「木柱間の構造物」を想定し、周礫はその構造物下端の補強であると捉えている。

堤遺跡では、周礫を伴う称名寺Ⅱ式期の柄鏡形敷石住居が３軒確認されている。特に５号住居(第28図)の周礫状況について詳細に述べている。住居内でも周礫の状況は異なるようであり、「Pit３－５の柱穴間には幅12～20cmを測る浅い周溝があり、Pit５－７の柱穴間には仕切り石状に扁平礫が直線的に長軸を揃えて並ぶ」[註7]とある。さらに作業段階ごとの写真を読み解く中で、住居構築に際し、柱穴を掘り、柱を立てた後に周礫を貼付け、床に敷石をするという作業順序を想定している。つまり、敷石住居構築段階で周礫が付設されていたとみている。

ここで四万遺跡１号住居周礫を見てみたい。まず周礫の構築状況であるが、第13図Ｂ－Ｂ′断面からは床面上部に周礫が見られる。これは、貼床構築後に周礫を築いたと言える。Ａ－Ａ′断面では、床面下部にも礫が見られる。この礫は、貼床前に構築された礫であると言え、立替前の周礫と想定される。また、周礫は柱間単位で構築されたようである。柱間は20～30cm幅の帯状に小礫が敷かれているが、柱ピット直近では周礫が疎らである。このような例は、小室遺跡や荒砥二之堰遺跡など多くの遺跡で見られる[註8]ことから、荒砥二之堰遺跡報告書で、石坂茂氏は、「周礫と柱穴の同時性は明らかであろう」[註9]と考察している。四万遺跡１号住居も同じ状況が推定されよう。すでに３章で述べたが、方形石囲い施設付近の板石が立てて並べられている。この敷石の機能として、

周礫の土留めを推定した。以上の調査の所見を鑑み、荒砥二之堰遺跡や堤遺跡の成果を援用するならば、四万遺跡の柄鏡形敷石住居は、柱穴を掘り、柱を立てた後に柱間に周礫を構築し、周礫の内側に板石を敷くという作業で作られたと考えられる。なお、荒砥二之堰遺跡や堤遺跡で見られるような周礫下の周溝状掘り込みは確認されなかった。

機能　四万遺跡１号住居の周礫について、「構造」で述べたように柱穴と周礫の同時性が推定でき、住居構造の一部として機能していたと言える。では、その用途はどのようなものであったのだろうか。先学に依れば、尾崎喜左雄氏は小室遺跡の報文の中で、「明らかに土手状遺構の造られる以前に柱が立てられていた状態が知られ、柱を立てて、土手状のものをつくりつけた」註９とし、「防水装置」を想定している。小谷田政男氏は東京都下平尾台原遺跡を分析する中で「柱穴または壁面の構築に関係する配石」としての機能を想定している註10。石坂氏は、「木柱間の構造物に関連した施設」であり、前述した周礫下の周溝状掘り込みに、その素材を埋め込み、素材の下端を周礫で補強したものであると想定している註11。

四万遺跡１号住居の場合、周礫下の周溝状掘り込みが確認されなかったため、石坂氏が言うような木柱間構造物を想定することは、難しい。構築に関しては、尾崎氏の主張に従えるが、周礫が住居内に構築されており、防水のためとは言い難い。四万遺跡の周礫は壁面から離れており、小谷田氏の言うように、壁面構築に関係するかは疑問が残る。いずれの説も四万遺跡１号住居の周礫状況からは採ることができない。ただし、その可能性としては、以下の事例から木柱間構造物が強い。

長野原一本松遺跡では、敷石住居内から炭化材が出土している註12。同遺跡５区60号住居(堀之内１式期、第28図)では、壁内縁から集中して炭化材が出土したのである。その炭化材について報告書では、「立位の炭化材も見られることから、壁をめぐる棚・ベンチ状の施設及び壁補強材として位置付けておきたい。炭化材と共に出土した小礫は、下部の補強材に充てられたものと考えた」註13としている。５区60号住居は四万遺跡１号住居と同じように小礫下から周溝状の掘り込みは確認されていない。また、荒砥二之堰遺跡もすべての住居から周溝状の掘り込みが確認されたわけではない。これらの状況を併せ考えれば、周溝状の掘り込みを伴わず、周礫の上に築かれた木柱間構造物の姿も想定できよう。

３．方形石囲い施設について

３章でも述べたように、四万遺跡１号住居では、石囲い施設が柄鏡形敷石住居の連結部分に構築されている。このような事例は、2000年の群馬県内集成段階で17例を数える註14。時期別には、加曽利Ｅ４式期９例、称名寺式期４例、堀之内式期３例である(時期不明１例)。傾向として、加曽利Ｅ４式期に盛行したようである。周礫と同様、この施設の構造と機能について考察したい。

名称　この施設の名称であるが、研究者により異なる。石坂氏は「箱状石囲い」と呼称し註15、鈴木徳雄氏は「連結部箱状石囲施設」と呼称し註16、池田政志氏は「連結部石囲施設」と呼称している註17。四万遺跡においては、調査時に「出入口石囲い施設」としていた。本報告では「方形石囲い施設」とする。その理由は「構造」の項で述べる。

構造　四万遺跡１号住居の石囲い施設は、炉の軸線延長上に、四方を板状の石で囲んで構築されていた。底板となるような扁平な礫は、底部では確認されなかった。小礫が２石出土したのみである。その名称であるが、調査の状況では、底板が確認されず、「箱状」とは言い難い。また、連結部分が一部分しか検出されず、「連結部」と積極的には言えない。そのため、板状の礫を方形に囲んでいることから「方形石囲い施設」とした。

四万遺跡１号住居では確認されなかったが、１号住居と同時期(加曽利Ｅ４式期)の他遺跡では、向原遺跡Ｃ区６号住居(第29図)註18のように、底に板石が敷かれる例や、滝原Ⅲ遺跡１号住居(第29図)註19のように、石囲いの中に土器が埋設される例が見られる。「炉の軸線上連結部に板石を用いて方形に囲む」という共通理解はあるが、その内部に関しては、様々なバリエーションがあるのであろう。

機能　柄鏡形敷石住居連結部における石囲い施設の機能については、諸説ある。山崎義男氏は長井遺跡の報文中で「貯蔵穴」ないしは「貯蔵所」としており、食糧貯蔵を目的とした施設と推定している註20。石坂氏、鈴木氏の両氏はその位置から連結部に設置されている埋甕と同様の性格を想定している註21。

連結部の石囲い施設に土器を埋納する例などを考慮す

ると、この施設は、埋甕から派生したものであることや、埋甕に代わる施設であったであろうことは首肯できる。また、底に板石を敷く行為も、入れ物としての甕と同様の機能であろう。石囲い施設内部の様々なバリエーションが、いずれも埋甕と同様の機能と考えるなら、四万遺跡１号住居方形石囲い施設も埋甕と同様の機能と捉えられるであろう。

４．小結

周礫及び方形石囲い施設は、どちらも群馬県内における柄鏡形敷石住居の構成要素である。先行する研究に導かれ、四万遺跡１号住居のそれの構造と機能について述べた。筆者自身が浅学であり、新たな視座を生み出すことはできなかった。しかしながら、考察した内容は、積み重ねられてきた研究の成果と大きな齟齬は無いと言える。

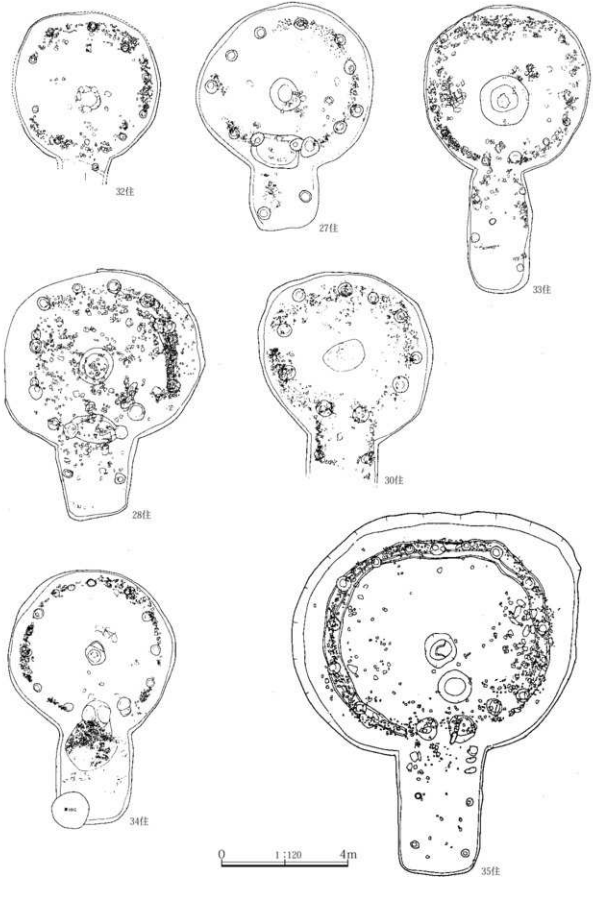
他地域と比べ、柄鏡形敷石住居調査事例が少ない中之条地域である。特に資料の乏しかった四万において、加曽利Ｅ４式期柄鏡形敷石住居の資料蓄積が確実にできたと言えよう。その意味で、今回調査がなされたことは大きい。

本文を執筆するにあたり石坂茂氏より助言を得ました。末筆ではありますが、ここに記して感謝申し上げます。

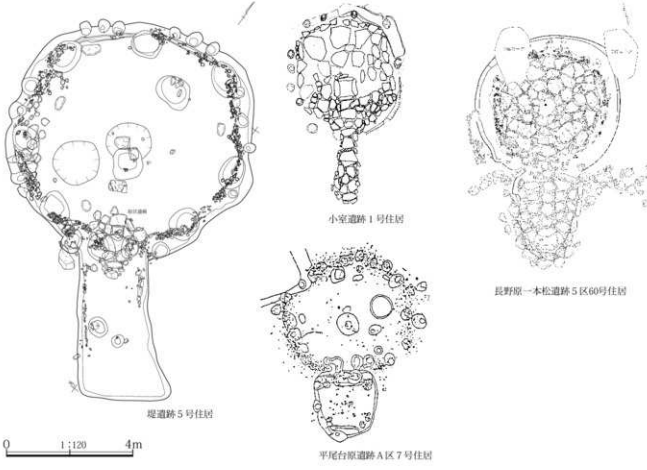
註１　引用参考文６
註２　紙幅の都合上、仔細は省略するが1985年の石坂氏の集成(引用参考文献３)と比較した結果、2000年の集成は、事例の増加はあるが、時期・時代の傾向に特異な変化は見られない。そのため、現段階でも傾向は変わらないと判断した。
註３　註１と同じ。
註４　引用参考文献３
註５　引用参考文献８
註６　註４pp.243
註７　註５pp.41
註８　註４pp.245
註９　引用参考文献２
註10　引用参考文献８
註11　註４pp.247
註12　引用参考文献７
註13　註12pp.281
註14　註１と同じ。
註15　引用参考文献４
註16　引用参考文献10
註17　註１と同じ。
註18　引用参考文献11
註19　引用参考文献12
註20　引用参考文献14
註21　それぞれ註15及び註16と同じ。

引用参考文献

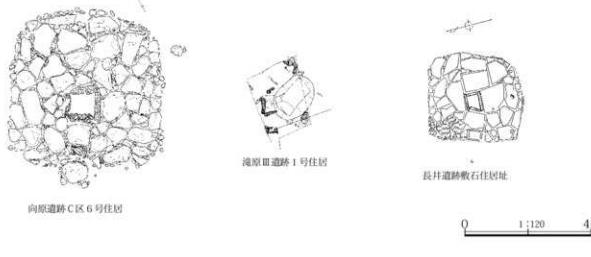
1．神奈川県立埋蔵文化財センター 1997『敷石住居の謎に迫る記録集』
2．北橋村教育委員会 1968『小室遺跡』
3．財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985『荒砥二之堰遺跡』
4．財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『仁田遺跡・暮井遺跡』
5．財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ』
6．財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000『三ッ子沢中遺跡』
7．財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『長野原一本松遺跡（４）』
8．公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013『堤遺跡』
9．小谷田政男 1979「稲城市平尾台原遺跡の敷石住居」『多摩考古』16 多摩考古学研究会
10．鈴木徳雄 1994「敷石住居址の連結部石囲施設―群馬県における敷石住居内施設の一様相」『群馬考古学手帳』vol.４ 群馬土器観会
11．長野原町教育委員会 1996『向原遺跡』
12．長野原町教育委員会 1997『滝原Ⅱ遺跡』
13．村田文夫 2006『縄文のムラと住まい』慶文社
14．山崎義雄 1954「群馬県長井敷石住居址調査報告」『考古学雑誌』第39巻２号日本考古学会
15．山本暉久2010『柄鏡形(敷石)住居と縄文社会』六一書房



第27図　周礫を伴う柄鏡形敷石住居（１）（荒砥二之堰遺跡）



第28図　周礫を伴う柄鏡形敷石住居（２）



第29図　石囲い施設を伴う柄鏡形敷石住居

1号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底		高				
第17図 PL.8	1	縄文 深鉢	床上14～16cm 口縁片						A	口唇外端に摘み状の小突起を付す。微隆起帯とそれに沿ったやや深く細い沈線による区画文内にLR縄文を充填する。口縁付近は横・縦位施文により羽状構成。外面に煤状炭化物が付着。	加曽利E４式
第17図 PL.8	2	縄文 深鉢	床上６～48cm 胴部片						A	微隆起帯とそれに沿ったやや深く細い沈線による区画文内に2種類のLR縄文を充填する。No.10の胴部破片か。	加曽利E４式
第17図 PL.8	3	縄文 深鉢	床上28cm 口縁片						A	口縁部に微隆起帯を巡らせ、摘み状の小突起を付す。細い沈線区画文内にRL縄文を充填。	加曽利E４式
第17図 PL.8	4	縄文 深鉢	床上10cm 口縁片						A	体部上半に細く浅い単沈線により波状文を施し、その区画内外には縄文を充填する。外面に煮零れ状炭化物が多量に付着。	加曽利E４式
第17図 PL.8	5	縄文 深鉢	床直 胴部片						A	細い無節の L縄文を縦・横・斜位に施文。内外面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利E４式
第17図 PL.8	6	縄文 深鉢	床下１cm 胴部片						A	浅い刷毛目状の集合沈線文を縦位に施文。内面は丁寧な磨き状の整形。	加曽利E４式
第17図 PL.8	7	縄文 深鉢	埋土 底部片		底	(10.0)	高		A	底部周縁は無文となる。	加曽利E式
第17図 PL.8	8	剥片石器 石鏃	埋土	長	幅	2.5 2.4	厚 重	0.7 3.5	黒曜石	先端部に素材のバルブを残し、厚みを持っている。未成品と考えられる。	平基無茎鏃
第17図 PL.8	9	剥片石器 石鏃(ドリル)	埋土	長	幅	(3.6) 1.1	厚 重	0.8 2.7	黒曜石	棒状。刃部欠損。側縁の稜線にはツブレまたは摩滅が認められる。	
第17図 PL.8	10	剥片石器 石鏃(ドリル)	埋土	長	幅	5.0 2.7	厚 重	1.4 10.8	黒色頁岩	剥片先端部に二次加工を施し刃部を作り出している。	
第17図 PL.8	11	剥片石器 打製石斧	埋土	長	幅	9.9 6.0	厚 重	1.4 93.9	細粒輝石安山岩	板状の剥片を素材とし、両面の周縁に二次加工を施す。直線状で鋭めの刃部である。	
第17図 PL.8	12	剥片石器 楔形石器	埋土	長	幅	1.5 2.4	厚 重	0.9 3.0	黒曜石	上下両端にステップ状の剥離が認められる。左側面では折れ面を打面として細かい剥離を施している。	
第17図 PL.8	13	剥片石器 磨製石斧(ミニチュア)	床上25cm	長	幅	3.6 1.3	厚 重	0.6 5.3	珪質頁岩	全面丁寧な研磨で仕上げられている。表裏面には研磨時の単位を示す稜線が残る。刃部は摩滅がなく、使用した痕跡は認められない。	
第17図 PL.8	14	剥片石器 石製品	床直	長	幅	9.0 8.8	厚 重	1.9 151.4	変質安山岩	不明石製品。板状剥片素材。正面には平滑面が内眼でも観察でき、100 ～ 200倍の顕微鏡下では、斜行方向の線状痕が多く認められる。	

2号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底		高				
第19図 PL.8	1	縄文 深鉢	埋土 胴部片						A	深い沈線区画文内に細いLR縄文を充填する。内面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利E４式
第19図 PL.8	2	縄文 深鉢	埋土 胴部片						A	幅広の沈線文とLR縄文を縦位に施文する。	加曽利E３式
第19図 PL.8	3	縄文 深鉢	埋土 胴部片						B	横位に連続する襞状の押圧文を施す。外面に煮零れ状炭化物付着。	阿玉台Ⅰ式
第19図 PL.8	4	縄文 深鉢	埋土 胴部片						B	横位に連続する襞状の押圧文を施す。	阿玉台Ⅰ式
第19図 PL.8	5	縄文 深鉢	埋土 胴部片						E	浅い単沈線の区画文内にサルボウ等の貝殻腹縁圧痕文が充填される。	田戸上層式

1・2・7・8号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底		高				
第22図 PL.8	1	縄文 深鉢	床上10～18cm 口縁～胴部1/4						A	口唇下に単沈線を、その下位に２本単位の波状沈線文を巡らせる。胴括れ部は横位沈線区画内に先端丸棒状工具による刺突文を施す。各文様の区画間は紅縄文を充填。内外面ともに被熱による風化。	加曽利E３式
第22図 PL.8	2	縄文 深鉢	埋土 胴部片						D	0段多条の撚とLR縄文を交互に施文して菱形モチーフを構成する。No.3と同一個体。	有尾式
第22図 PL.8	3	縄文 深鉢	埋土 胴部片						D	No.2に同じ。	有尾式
第22図 PL.8	4	縄文 深鉢	床上23cm 底部片		底	- (14.6)	高	-	B	底部外面に１本潜り２本越え２本通しの胴代痕を持つ。	五領ヶ台式
第22図 PL.8	5	縄文 深鉢	床上10cm 底部欠損,4/5		底	12.8 (6.5)	高	(15.9)	B	折返し口縁の上端に角押文を周回施文。口縁部口粘土棒を芯にした小突起を４単位に貼付し、横位の角押文を５本施文する。また各小突起の頂に縦位の角押文を３～４本施す。体部下半は括れ部の X字状隆帯を連結したクランク状隆帯懸垂文を貼付し、隆帯の両側や区画内に角押文を施す。体部にも口縁部と類似した小突起が最低２方所に貼付されるが、口縁部・体部共に１方所が剥落する。口縁部外面に煮零れ状炭化物付着。	阿玉台Ⅰａ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第22図 PL.9	6	縄文 深鉢(波状)	床上11cm 口縁片	口		高		B	隆帯の区画文に平行して単沈線文を施し、単沈線文の一部分に角押文が付加される。口唇部内側に折返し状の肥厚部を持つ波状口縁。	五領ヶ台Ⅱ式
第22図 PL.9	7	縄文 深鉢	床上11cm 胴部片	口 底		高		B	頸部に交互刺突による波状文を巡らせ、以下に平行沈線による懸垂文を施す。	五領ヶ台Ⅱ式
第22図 PL.9	8	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高		C	横位の平行沈線文と交互刺突の波状文を施す。	五領ヶ台Ⅱ式
第22図 PL.9	9	縄文 深鉢	床上10cm 胴部片	口 底		高		C	胴部下半に平行沈線文を施す。	五領ヶ台Ⅱ式
第22図 PL.9	10	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高		A	RL縄文を縦位施文後に沈線懸垂文内の縄文を磨り消す。外面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ３式
第22図 PL.9	11	縄文 深鉢	床上45cm 胴部片	口 底		高		A	口縁部に隆帯の楕円区画文を貼付する。口縁部は横位、胴部は縦位のRL縄文を施す。	加曽利Ｅ３式
第22図 PL.9	12	縄文 深鉢	埋土 底部片	口 底	～ (9)	高	～	A	LR縄文を縦位施文後、沈線懸垂文を施す。	加曽利Ｅ３式
第22図 PL.9	13	縄文 深鉢	床上７cm 胴部片	口 底		高		A	L縄文を縦位施文した胴部破片。	加曽利Ｅ３式
第22図 PL.9	14	縄文 深鉢	床下10～床上13cm 口縁～胴部1/5	口 底	(29.2) ～	高	～	A	口縁に単沈線文を巡らせ、以下に複数本の半截竹管を単位とした櫛毛目状の条線文を縦位施文。内外面ともに被熱風化し、外面全体と内面底部に煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ３式

１号遺物集中地点

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.9	1	縄文 深鉢	埋土 底部3/4	口 底	5.4	高		A	底径の小さな上器。	中期
第24図 PL.9	2	縄文 深鉢(小波状)	確認面から４cm 口縁片	口 底		高		A	口縁部に隆帯Ｓ字文やそれを連結する弧線文による区画内に沈線文を充填する。波状口縁を持つ。外面に煮零れ状炭化物付着。	郷土式
第24図 PL.9	3	縄文 深鉢	確認面から８cm 胴部片	口 底		高		A	２本の隆帯懸垂文に沿って沈線文を施し、区画内に綾杉文を施文する。外面に煮零れ状炭化物付着。	郷土式
第24図 PL.9	4	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高		A	沈線懸垂文と櫛毛目状の条線文を施す。外面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	5	縄文 深鉢	確認面から17 ～ 21cm 胴部片	口 底		高		A	縦位の条線文を施文した後に、２本の沈線懸垂文を施す。内面は被熱によるハゼ、外面は煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	6	縄文 深鉢	埋土 口縁片	口 底		高		A	複数本の半截竹管を単位として、密集した沈線文が口縁部より縦位施文される。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	7	縄文 深鉢	確認面から６cm 胴～底部1/4	口 底		高		A	条線文を縦位施文後に、平行状や蛇行する懸垂文を施す。内面はほぼ全面に、外面は一部に煮零れ状炭化物付着。外面は被熱によるハゼが顕著。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	8	縄文 深鉢	確認面から17cm 胴部片	口 底		高		A	長さ３cm前後の単沈線文を縦位に密接施文する。外面に煮零れ状炭化物付着。	郷土式
第24図 PL.9	9	縄文 深鉢	確認面から19cm 口縁片	口 底		高		A	隆帯の渦巻文や楕円区画文内に０段多条のLR縄文が充填される。外面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	10	縄文 深鉢	確認面から４cm 口縁片	口 底		高		A	隆帯による楕円区画文内にLR縄文が充填される。外面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	11	縄文 深鉢	埋土 口縁片	口 底		高		A	円線状の幅広沈線による区画文内にRL縄文を施す。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	12	縄文 深鉢	確認面から21cm 口縁片	口 底		高		A	沈線区画内にRL縄文を充填する。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	13	縄文 深鉢	確認面から18cm 口縁片	口 底		高		A	幅広の隆帯により大柄な渦巻文を構成。内外面ともに被熱による風化。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	14	縄文 深鉢	確認面から18cm 胴部片	口 底		高		A	縦横位の隆線文を施し、RL縄文を充填的に施文する。	加曽利Ｅ２式
第24図 PL.9	15	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高		A	RL縄文を縦位施文後に平截竹管による平行沈線懸垂文を施す。内面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ２式
第24図 PL.9	16	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高		A	RL縄文を施文後に、２本の沈線懸垂文を施す。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	17	縄文 深鉢	確認面から４cm 胴部片	口 底		高		A	やや幅広の沈線による横位区画文や懸垂文の区画内にRL縄文を充填する。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	18	縄文 深鉢	確認面から14cm 胴部片	口 底		高		A	懸垂文の相互間にRL縄文を縦位施文する。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	19	縄文 深鉢	確認面から14cm 胴部片	口 底		高		A	３本単位の懸垂文相互間にLR縄文を縦位に施文する。内外面ともに被熱風化。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.9	20	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高		A	RL縄文を縦位施文後に、平行および蛇行する懸垂文を施す。内外面ともに被熱風化及び煤状炭化物が付着。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.10	21	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高		A	RL縄文を縦位施文後に、平行および蛇行する懸垂文を施す。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.10	22	縄文 深鉢	確認面から17cm 胴部片	口 底		高		A	微隆起状の懸垂文に沿って円線状の沈線文を施す。縄文はRLの縦位施文。内外面ともに被熱風化。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.10	23	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高		A	低平な隆帯懸垂文と充填的なRL縄文を施す。内面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ３式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.10	24	縄文 深鉢	確認面から21cm 胴部片	口 底		高			A	２本の横位沈線文内に指頭状の押圧文を施す。内外面ともに被熱風化とハゼ。	加曽利Ｅ３式
第24図 PL.10	25	縄文 深鉢	確認面から６cm 胴部片	口 底		高			A	２本の沈線により波状文が構成されると考えられる。縄文は施文なし。内外面ともに被熱による風化・ハゼ。	加曽利Ｅ４式
第24図 PL.10	26	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高			A	L縄文を縦位施文。	加曽利Ｅ４式
第24図 PL.10	27	縄文 浅鉢	確認面から22cm 口縁片	口 底		高			A	口唇部外縁が肥厚し、口縁部は無文となる。	堀之内１式
第24図 PL.10	28	縄文 深鉢	確認面から11cm 胴部片	口 底		高			A	沈線により重弧状の文様を構成。	堀之内１式
第24図 PL.10	29	縄文 ミニチュア	埋土 口縁片	口 底		高			A	縦位の沈線文が存在するが、全体の文様構成不明。外面に成形時の指頭状圧痕が残る。	
第25図 PL.10	30	剥片石器 石鏃	床上20cm	長 幅	(1.9) 1.2	厚 重	0.4 0.4	黒曜石		両面とも押圧剥離で丁寧に仕上げられている。	凹基無茎鏃
第25図 PL.10	31	剥片石器 打製石斧	床上３cm	長 幅	13.7 6.4	厚 重	3.0 267.1	細粒輝石安山岩		表裏面とも刃部周辺に内眼観察で摩滅が見られる。両側縁の摩滅が著しく着柄痕と考えられる。	
第25図 PL.10	32	石製品 石製品	埋土	長 幅	3.7 3.2	厚 重	1.1 14.6	デイサイト凝灰岩		不明石製品。扁平な小礫の一端に平滑面が認められる。	

遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第26図 PL.10	1	縄文 深鉢	埋土 口縁片	口 底		高			C	口唇部上端に刻み目を持ち、横位の交互刺突や隆帯文を施文後に1段縄文を横位に施す。	五領ヶ台式
第26図 PL.10	2	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高			C	縦位の隆帯懸垂文に沿って平行沈線文を施文後に、縦位に1段縄文を施す。	五領ヶ台式
第26図 PL.10	3	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高			C	1段縄文を横位施文後に、深い平行沈線文や隆刻文を施す。	五領ヶ台式
第26図 PL.10	4	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高			C	螺旋状の渦巻文を角押文により構成する。	阿玉台Ⅰａ式
第26図 PL.10	5	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高			B	結節沈線的な横位波状文を施す。	阿玉台式
第26図 PL.10	6	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高			A	刷毛目状の条縄文が縦位に波状構成される。	加曽利Ｅ３式
第26図 PL.10	7	縄文 深鉢	埋土 口縁片	口 底		高			A	口縁部に２本の波状沈線文を施し、その外縁に1段縄文を充填施文する。内外面ともに煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ３式
第26図 PL.10	8	縄文 深鉢(波状)	埋土 口縁片	口 底		高			A	口唇下に棒状工具による刺突文を巡らせ、以下に沈線による区画文を施して、1段縄文を充填する。口縁波頂部下に小突起を付す。内外面ともに被熱風化し、外面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ４式
第26図 PL.10	9	縄文 深鉢	埋土 口縁片	口 底		高			A	口唇下に浅い凹線状の沈線文を巡らせ、以下に1段縄文を縦位施文する。	加曽利Ｅ３式
第26図 PL.10	10	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高			A	２本の沈線文によりU字状または波状の区画文を構成する。区画内に1段縄文を充填。外面に煮零れ状炭化物付着。	加曽利Ｅ４式
第26図 PL.10	11	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高			A	２本沈線により文様を構成。縦かいL縄文を施す。	堀之内１式
第26図 PL.10	12	縄文 深鉢	埋土 胴部片	口 底		高			A	無節のL縄文を縦位に施文。	堀之内式
第26図 PL.10	13	剥片石器 石鏃	埋土	長 幅	2.6 1.7	厚 重	0.5 1.8	黒色頁岩		全面押圧剥離。腹面側は背面側よりも平坦な剥離が施されている。	凹基無茎鏃
第26図 PL.10	14	剥片石器 スクレイパー	埋土	長 幅	1.8 1.9	厚 重	0.7 1.9	黒曜石		小形。背面全周に二次加工を施し、スクレイパーエッジを作り出している。	

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	しまいせき
書　　名	四万遺跡
副　書　名	平独７軸道路整備推進事業(国)353号駒岩拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第589集
編著者名	長谷川博幸
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20140826
作成法人ＩＤ	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地２
遺跡名ふりがな	しまいせき
遺跡名	四万遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんなかのじょうまちおおあざしま
遺跡所在地	群馬県吾妻郡中之条町大字四万
市町村コード	10421
遺跡番号	0023
北緯(世界測地系)	363938
東経(世界測地系)	1384750
調査期間	20130701-20130731
調査面積	474.55㎡
調査原因	道路改築
種　　別	集落
主な時代	縄文時代
遺跡概要	縄文時代－竪穴住居３＋土坑10＋遺物集中地点１
特記事項	縄文時代中期後半集落
要　　約	本遺跡は社会資本総合整備(防災・安全)国道353号(駒岩拡幅)事業に伴い平成25年度に発掘調査が行われた。本遺跡からは、縄文時代中期後半加曽利Ｅ４式期の柄鏡形敷石住居が検出されており、集落域の一部を調査したものである。

写 真 図 版

1　調査区全景（北西から）

2　調査区全景（南から）

1　1号住居全景(南から)

2　1号住居柱穴検出状況(南から)

1　1号住居石囲いゲ炉と石囲い施設全景(南から)

2　1号住居石囲いゲ炉土層断面(南東から)

3　1号住居石囲い施設土層断面(東から)

4　1号住居石囲いゲ炉石除去後状況(北から)

5　1号住居石囲い施設礫除去後状況(南から)

6　1号住居遺物出土状況(南東から)

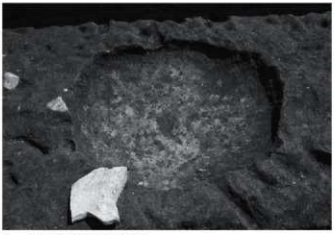
7　1号住居磨製石斧出土状況(南東から)

1　2号住居全景(南西から)

2　3号住居全景(南西から)

1　1号土坑遺物出土状況(南西から)

2　1号土坑出土遺物(南西から)



3　1号土坑全景(北西から)

4　2号土坑全景(北西から)

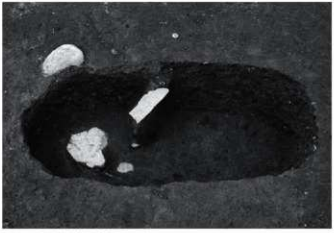
5　2号土坑遺物出土状況(北西から)

6　2号土坑出土遺物(北西から)

7　3号土坑全景(西から)

8　4号土坑全景(西から)

1　5号土坑全景(西から)



2　6号土坑全景(南西から)

3　7号土坑全景(北西から)

4　5・6・7号土坑(西から)

5　8号土坑遺物出土状況(北から)

6　8号土坑全景(西から)

7　9号土坑全景(南西から)

8　10号土坑全景(南西から)

1　1号遺物集中地点全景(北から)

2　1号遺物集中地点全景(南から)

3　基本土層(西から)

4　調査風景(北東から)

5　1号住居調査風景(西から)

6　四万遺跡近況(北から　平成26年5月23日撮影)

PL.8

1号住居出土遺物

17図－1

17図－2

17図－3

17図－4

17図－5

17図－6

17図－7

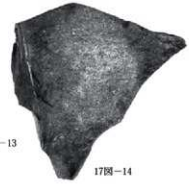
17図－8

17図－9

17図－10

17図－11

17図－13


17図－14

17図－12

2号住居出土遺物

19図－1

19図－2

19図－3

19図－4

19図－5

1号土坑出土遺物

22図－1

22図－2

22図－3

2号土坑出土遺物

22図－5

22図－4

7号土坑出土遺物

22図－6

22図－7

22図－8

22図－9

22図－10

8号土坑出土遺物

22図－11

22図－13

22図－12

22図－14

遺物集中地点出土遺物（1）

24図－1

24図－6

24図－2

24図－3

24図－4

24図－5

24図－7

24図－8

24図－9

24図－10

24図－11

24図－12

24図－13

24図－14

24図－15

24図－16

24図－17

24図－18

24図－19

24図－20

PL.10

遺物集中地点出土遺物（2）

24図－21

24図－22

24図－23

24図－24

24図－25

24図－26

24図－27

24図－28

24図－29

25図－30

25図－31

25図－32

遺構外出土遺物

26図－1

26図－2

26図－5

26図－6

26図－7

26図－8

26図－3

26図－4

26図－9

26図－10

26図－11

26図－12

26図－13

26図－14

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第589集

四　万　遺　跡

単独７軸道路整備推進事業(国)353号駒沢拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26(2014)年８月21日　印刷
平成26(2014)年８月26日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／川島美術印刷株式会社